

⑤ 事件叙述・研究資料 (B)

1

富沢実「官憲に踏みじられた文芸講演会・伊勢崎署占領事件起こる・たかいたつた講師らの釈放」(『群馬県社会運動物語』所収、1968年)

官憲に踏みじられた文芸講演会

県議員選挙を目前にした同年九月六日、伊勢崎の社会民衆党支部を中心とした文化団体では、同市の共栄館で文芸講演会を開催することになっていた。

一応合法政党に属していた青年分子は、この講演会を単なる文化行事とすることに満足せず、大いに左翼気運をもちあげようと準備した。講師は、その頃中央文壇を圧していた『一九二八

・三・一五』や『蟹工船』のプロレタリア作家小林多喜二、新劇演出家であり劇作家でもある村山知義、戦後共産党から参議院議員となり、その後党から除名されて話題をまいた中野重治ら数名であった。

警戒中の伊勢崎署のスパイ二名の同乗を断つて本庄駅から車で迎えた菊池盛男(元市議、菊池敏清らの急進青年分子に案内されて、菊池(敏)宅の青年を中心にした会合に出席した多喜二らは、近くの菊池(盛)宅で昼食をすませて、会場へ戻り一ぶくしている時、トラック二台に分乗した警官隊二・三〇名がアゴ紐姿で乗りつけて参会者を包囲し、無届け集会だということで一斉検挙の暴挙に出た。

検束された主な人は、講師全員と菊池邦作、斉藤力、岡田熟、弥勒寺清などこの地方における急進的的青年分子であった。菊池(盛)は、夕食の後片づけで少し遅れたので一応検束をのがれた。

一方、会場には左翼文壇の著名作家小林らが来るとあって超満員の盛況で、予定の午後一時も過ぎたので、今かいまかと開会を待ちあぐんでいた。

警察では、この催しを最初からぶちこわそうとねらっていたから簡単に講師らを釈放する気配はなく、そのうえ主催者側の多くは検束されてしまったが、その第一報は残された吉田庄蔵(印刷会社経営)によってもたらされ、壇上からは開会遅延のやむを得ない事情が再び会場にも

116

ぐり込んだ菊池(盛)により幾度か訴えられたが彼もたちまち検束されてしまった。二時になっても、三時になっても、五時、六時を過ぎても誰一人帰ろうとする者がいない。聴衆はようやく殺気立ってきた。県会の選挙も、白熱化しようとしている際だから、いやがうえにも氣勢が上がり、警察の不当弾圧を強く感じた。

伊勢崎署占領事件起こる

このような事態は、一時間足らずのうちに、全県の農民組合や無産党の選挙事務所に通話連絡された。それとばかりに、同志の面々が、伊勢崎目指して急ぎよトラックなどにより集まってきた。この時機をきかせてすばやく県下の組織に救援を求める任務を果たした人こそ、先年千葉銀行事件で名をはせたレインボー社長坂内ミノブさん(当時の吉田夫人)の若妻時代の勇敢な姿であったのだ。

急報に接して続々伊勢崎に集まってきた中には、遠藤可満(元県議、石井繁丸(余護士、現前橋市長、佐田一郎(現参議員自民党、堤源寿(現共産党副委員長、坂内一登司(前橋市、アルプス書店主、遠藤一郎(米穀商、戦後日農常任書記)ら無産陣営第一線の指導者がいた。

とくに遠藤可満などは、勢多郡柏川村の小学校で県議選候補尾池真弓(事務局長永好)の応援演説中に、この知らせをうけたので急ぎよ前橋へとって返して、その日開会中であつた臨江閣

(現前橋市公民館)での無産党の演説会に集まっていた同志達をさそい、教台のトラックを借り集めて、四・五〇名を、それぞれにシートをかぶせて、西瓜輸送と称して送りこんだ。

選挙で手すだつた警察は、完全にしてやられた格好であつた。会場は殺気立って手のくだしようがなく、県下から馳せ参じた精鋭三〇〇名と合流した二〇〇名の聴衆は、「講師を奪還しろ!」と一斉に伊勢崎署へ殺到した。狼狽した警察は、数十名の警官を非常召集して防備を固めたが、衆寡敵せずたちまち署の玄関前で乱闘がはじまり、サibelは折れ、帽子が飛ばされ、蹴飛ばされる者、なぐられててん倒する者、鼻血を流す者、彼我入り乱れての激闘となつたあげく、今瀬署長以下はいつの間にか姿を消してしまつて、革命歌が留置場の内外で一斉に吹きあがったかと思うと、どこで用意したのか、アンペラが運ばれてきて、警察の床にしかれ、坐り込みがはじめられた。

たかいたつた講師らの釈放

警察が陣容を建て直すのには、二時間半もかかったが、何しろ大衆によつて警察は占領されているので手のくだしようもない。石井弁護士ら前記の代表団数名は、あわててかけた泉守照特高課長(当時の弾圧責任者、現全国交通安全協会事務局長)と交渉をつづけたすえ、次のような条件で妥協が成立した。この結果、さしも興奮した大衆は、ひとまず引きあがることを承

117

116

諾した。

その条件は、全く警察側の完全敗北を意味するものであった。

(一) 明朝講師を釈放する。

(二) 主催者側は、責任者一人を残し、全員明日釈放する。

(三) この騒ぎで犠牲者は出さない。

昭和六年九月八日付の『上毛新聞』は、当時の状況を次のように伝えている。

「東京から来たナツプ作家小林多喜二外数名及び、佐波郡内無産党員小林(現菊池)邦作氏外数名の検束騒ぎについてその理由は、伊勢崎署で絶対秘密にしているので判然しない。尚七日朝今瀬署長並に党員の言質によると、同朝八時頃石井繁丸氏外代表者が、釈放願いに出席する前に、自動車で木庄駅に送り、東京に帰還釈放したものと解せらる。尚郡内党員は、遅くとも正午頃までに釈放される模様であった。

検束の経路

ナツプ作家及び無産党員検束の経路は、大体夕刊所報の通りである。

一、東京より来た弁士一行六名、佐波郡党員四名は、講演会場に赴くべく佐波郡茂呂村菊池盛男氏宅で検束された。

一、その理由を訊き且つ釈放願いに行つた菊池盛男氏は、署で検束された。

一、前橋より応援の石井繁丸氏外党員を合せ五十余名は、同夜二一時頃より七日午前二時頃まで交渉を続け一時大混乱に陥り、十余名は検束された模様であるが、間もなく釈放、一同は事務所に引上げたのである。

然して伊勢崎署は、非常召集を行ない県警察からは、泉特高課長以下数名来崎協力疾風迅雷の大活動振りであった。

これらの報道は、新聞検閲がきびしかったから、必ずしも事件の真相を伝えていないが、いかにこの時の大衆行動がはげしかったかが察せられる。そのうえ近代の群馬県社会運動の中で、これ程の事件が一人の犠牲者も出さずに終結をみたことは、他に例をみず、全国でも珍しいケースとされている。

なお、文中に出てくるナツプとは、全日本無産者芸術団体協議会の略称でエスペラントの Nippona Proleta Artista Federacio の頭文字 N.A.P.F. であつて、小林多喜二はこの協議会の一構成団体であつた日本プロレタリア作家同盟の書記長であつたが、昭和八年二月二〇日街頭連絡中に逮捕虐殺された。

2 群馬県労働運動史編さん委員会「警察を占拠する文化サークル」 『群馬県労働運動史(上) 先駆けの人びと』、1974年)

警察を占拠する これは共産党に対する弾圧ではありませんが、伊勢崎で社民党伊勢崎支部と大衆党の文化サークルが、伊勢崎署を占拠するという事件が起ります。応援部隊によって伊勢崎署を占拠するという事件が起ります。

この事件は、共産党に如何に弾圧をかけても官憲の側にだれにでもわかるようなスキと欠陥があれば大衆はたかえりし、たかえりし条件をつくり出すことができるという好例です。

社民党伊勢崎支部は菊池邦作や盛男、斎藤力などによって運営されていましたが、彼らは文化サークルをつつて青年たちを集め、革新思想を鼓吹していました。

そして昭和六年九月六日、中央のプロ文学の大立物を招んで文化講演会を開き氣勢をあげることに成り、当時「一九二八・三・一五」や「蟹工船」を発表してプロ文学の分野だけでなく文壇全体に圧倒的な人気を獲得していた小林多喜二や新劇の村山知義、詩人の中野重治らを招ぶことに成功しました。

中央文学界の大物が顔を揃えてくるということで会場の共栄館は超満員の盛況で、聴衆は大物のナマの声を期待して待っていました。到着はしたらしいが講演会がはじまる気配がありません。

これは警察がこの講演会を打ち壊そうとして、講師たちが会場の控え室で主催者たちと一休みしているところへ乗り込んで、講師と主催者全員を無届集会だといいがかりをつけて検挙してしまつたのです。

警察は、夜になつても帰さなければ講演を聴きに来た聴衆もあきらめて帰るだろう位に考えていたのかも知れませんが、聴衆は夕方になつても帰りません。そこへ気をきかせて、先年千葉銀行事件で有名になつた当時吉田印刷の妻君だつた坂内ミノブが県下各地の無産党関係の人たちにこのことを知らせたので、ぞくぞくと県下各地から伊勢崎に応援がかけつけ、「講師を毒遣しろ」とばかりに警察におしかけ、乱闘の末警察を占拠してしまいました。

ここに集つてきた県の幹部は社民党遠藤可満、日労党石井繁丸、佐田一郎などで、これらの人たちは弁護士の石井繁丸を先頭に警察と交渉し、講師の釈放と犠牲者は出さないことと条件をとりこに成功しました。

これは、若し集会がゆるせぬなら法にもとづいて解散を命ずべきであるにかかわらず、理由もなく検挙して聴衆の退散をまつという危険な警察のやり方が法のワケを超えてしまつたからで、そこをつかれて警察は手も足もでなかつたのです。

稲沢潤子「一斉検挙と拷問」の一部（『自立する女性の系譜・お母さん弁護士平山知子の周辺』、1977年）

邦作は、一九二三年の群馬青年共産党事件を含めて、戦前に八回の検束を受け投獄されているが、邦作にとって感激に満ちた忘れがたい事件に「伊勢崎警察署占領事件」がある。

それは一九三一年九月六日、伊勢崎市共栄館において、東京から小林多喜二、中野重治等を迎えての文芸講演会を開催した際のことであった。

その日群馬県警は、この講演会の開催を阻止するため、小林多喜二以下講師全員と地元の主権者（代表の邦作以下七名）を事前に検束してしまつた。この県警の暴挙に憤慨激昂した聴衆約三百人が、伊勢崎警察署に押しかけ、全員署内に坐り込み、署長に対し即時釈放を求めた。

これにおそれを感じた署長以下署員全員は、留置所係り一人を残して署外に逃亡、職場を放棄してしまつた。群衆が期せずして革命歌を合唱すると、留置所の中からもこれに呼応し、内外感

激の革命歌の合唱が続いた。午後八時ごろのことであったが、このあと群馬県警は全県下から三百余名の警察官を動員して、伊勢崎署の奪還を図つた。とうぜんのことながら、群衆と警察官との大乱闘となつた。

帽子を取られた者、ボタンをもぎとられた者、眼帯をする者、顔に伴創膏を貼つている者、翌朝の伊勢崎署の風景は異様であった。警察署長の責任はもとより、県警察部長の退任も不可避といふ事象であった。そのため県警察部長は、群衆側の代表者遺藤可満、吉田庄蔵、沢沢広吉等に妥協を申し入れ、

- ①この事件で犠牲者を出さない。
- ②新聞発表をしない。
- ③小林多喜二以下講師の即時釈放をする。

の三条件で事態の收拾を図りたいと申し入れてきた。群衆代表もこれを了承して、問題はいちおうの解決を見た。小林多喜二以下講師の全員は翌朝釈放されたが、邦作だけは総括責任者として二晩留置され、

なんの取調べもなく、調書も取られず、二日後の朝釈放された。戦前八回検束された邦作が、取調べもなく調書も取られず釈放されたのは、このときだけだつた。

後年、この事件に関する座談会を当事者たちで開いたが、もし警察側に手落ちがなく、これを正式に刑事事件として取り上げられたら、おそらく騒擾罪で刑期七年ぐらいの懲役に処せられたであろうとの意見が出された。

石原征明「伊勢崎事件」（『群馬県百科事典』所収、1979年）

伊勢崎事件 いせさきじけん 作家小林多喜二らの講演会問題から発生した伊勢崎警察署襲撃事件。1931（昭和6）年9月6日、伊勢崎の社会民衆党支部を中心にした文化団体は、共栄館にプロレタリア作家小林多喜二・劇作家村山知義・中野重治らを招き文芸講演会を計画、県議選にそなえ左翼気運を盛りあげようとした。この動きを察知した警察は、トラック2台に分乗した警官隊20~30人を会場に派遣、無届け集会の嫌で一斉検挙を行った。検束された人は講師全員と菊地邦作・斎藤力らこの地方の急進的青年であった。検挙の通報は直ちに全県の農民組合や無産党の選挙事務所になされ、遠藤可満・石井繁丸・佐田一郎・堤源寿・坂内一登司・遠藤一郎ら当時の無産党の指導者が続々集まった。全県から馳せ参じた300人と会場の聴衆200人は合体し「講師奪還」を叫んで一斉に伊勢崎警察署を襲撃、選挙で手すだった警察は不意をつかれ、占拠された。のち石井繁丸らの代表団と泉守照特高課長の間で交渉がなされ、講師らの釈放、この騒動で犠牲者を出さないなどの条件で妥協が成立した。 <石原征明>

5 矢島孝「民衆の勝利 伊勢崎警察署占拠事件」（『事件と騒動 群馬民衆闘争史』所収、1980年）

民衆の勝利 伊勢崎警察署占拠事件

治安維持法吹き荒れる

一九二五（大正十四）年治安維持法制定以来、思想弾圧、共産党に対する弾圧が続き軍国主義への道が着々と進められた。一九二九（昭和四）

年四月十六日共産党幹部市川正一をはじめとして数百人が逮捕された。群馬でも二十一人が検束され八人が起訴される事件が起こつた。いわゆる四・一六事件である。続いて、翌年十月一日「無産青年」の読者をねらつて大検挙が行われた。「無産青年」は無産青年同盟の機関誌で、無産青年同盟は合法的な青年組織であった。治安維持法は、社会運動が高揚する中で「死刑法」と形を変えただけでなく、大衆運動に対する弾圧を強めてきた。後には人道的見地から社会問題にとり組むキリスト教徒までも弾圧された。

ナップ作家文芸講演会

一九三一（昭和六）年九月六日

午後七時、無産党青年有志による

プロレタリア作家文芸講演会が伊勢崎の共栄館で開かれる予

定であった。当時プロレタリア作家として「蟹工船」などで

有名な小林多喜二や、新劇の村山知義、詩人の中野重治他二

名を東京より招き講演会を催す予定であった。小林・村山・

中野らは全国的に有名な芸術家でありナップ（プロレタリア

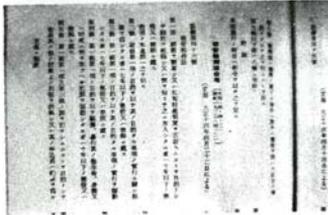
作家同盟）の活動家であった。そんな有名人名が伊勢崎に来る

とは不思議なくらいであった。当時伊勢崎にはナップの支部

組織があり、その機関誌「戦旗」が毎号五十部くらい送られ

配布されていた。そういう意味で伊勢崎は全国の活動のモデ

ル地区であった。ナップ会員菊池敏清の要請で中央の大人物



治安維持法

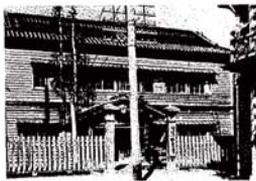
初期の世相と伊勢崎事件

昭和の改元は大正十五年十二月二日であり、年が明けた三月には金融恐慌が襲い、激動の昭和史の幕開となった。

昭和二年芥川龍之介が自殺し、大阪朝日はその論説欄で「大きな時代の影」と表現した。金融恐慌は若槻首相をして投げ出す結果となり、代って登場したのが田中義一であった。外相をも兼任した田中義一首相は、中国大陸での国民革命の対応に、山東出兵を皮切りに積極的な侵略政策を押し進めた。昭和二十年まで続く長い戦争の道りはこうして昭和史と共に始った。

昭和初期の世相は、不況と戦争の大きな軸を核に動き、政治的事件や経済活動もこの渦の中で激動したといってもよい。

昭和六年満洲事変が勃発し、軍国主義が高まる中、プロレタリア文化運動が結成され、小林多喜二等の文化活動と労働者の活動が急速な広がりを見せる中で伊勢崎事件は起きた。昭和六年九月六日伊勢崎の社会民主党中央にした文化団体の呼びかけで、プロレタリア作家小林多喜二や村山知義、中野重治等



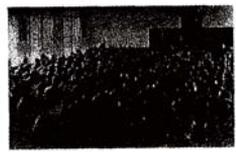
明治末の伊勢崎警察署。この後、大正15年に日吉町へ移り、事件の舞台となる。

招いて文芸講演会を共栄館で開く計画だった。

当時、県選選を控えた年であり、左翼運動の盛り上がりを見せたこの計画は警察に察知され事件へと発展した。警察は二十名を越える警官を一台のトラックに分場させて会場へ派遣し、無届け集会の理由で一斉検挙となった。

この時、講師全員と地域の急進的青年、菊池邦作・斎藤力などが検挙された。こうして伊勢崎事件といわれる伊勢崎警察署襲撃事件はこの後、警察への抗議として起きた。

警察の一斉検挙は直ちに県下の農民組織や無産党に連絡され、石井繁丸、佐田一郎、堤源寿、坂田一登司、遠藤一郎など当時の無産党の指導者等が全県から約三〇〇人急拠かけつけ、会場の約一〇〇人程の聴衆と共に抗議



昭和4年伊勢崎織物鏡技会の講評。この後は活況を迎えていた。この伊勢崎時代と戦争を敵しい時代となる。

集会となった。

抗議集会は「講師の毒選」を呼び、伊勢崎警察署を襲撃した。この時、警察は選挙で手薄の状態であったため、たちまち抗議集団によって占拠されたといわれ、後に石井繁丸らの代表団と特高課長との交渉の結果、講師の釈放と犠牲者を出さない約束で交渉は成立した。(群馬県百科辞典「上毛新聞社刊参照」)

伊勢崎事件は昭和の世相を象徴する事件であった。

一方、農業は不況の影響を最も強く受けたが、織物業界は銘仙が流行の先端であった時代で、飛躍的な増産の機運にあった。しかしこの銘仙の人氣はやがて需要のバランスを崩す要因となり、やがて「人絹」の使用問題と取り組まねばならなくなった。

時代は失業者や労働争議・小作争議の頻発する時代となっていた。

群馬県の主なできごと

- 1 ▼日本農民組合県連合会発足する
 - ▼前橋の初市に出入一〇万人
 - 2 ▼洋画家湯浅一郎没(六三歳)
 - ▼全国ではじめて桐生市の全小学校に各科医療班を新設する
 - 3 ▼美学の先駆者大塚保治没(六三歳)
 - ▼前橋市で全国農民組合県連合会第一回大会開かれる
 - ▼婦連獲得同盟の県支部創立され市川房枝が中央から来県
 - ▼高毛線若宿駅前で大火、八戸一棟が全焼した
 - 4 ▼桐生市で大火、八三三七棟を全半焼、全損害額は二〇万円にのぼる
 - ▼工学博士・政治家久米民之助没(七〇歳)
 - 5 ▼県水産試験場が落成
 - 6 ▼八高線資野駅五日間開通する
 - ▼労働大衆党県支部連合会創立される
 - 7 ▼上越線全線開通する
 - 9 ▼伊勢崎で開かれた小林多喜二らの文芸講演会、無届け集会として講師ら逮捕され、無産政党员ら伊勢崎署を一時間占領する
 - 12 ▼太田町(太田市)に中島飛行機株式会社設立される
- 前橋に県立水産試験場設立される
- 熊川良太郎、学生訪欧機青年ニッポン号で訪欧飛行に成功する
- 前橋市で小学校に歯科校医をおく

8 丑木幸男「無産運動の分裂」(『群馬県の百年』所収、1989年)

系統別農民組合一覧

名称	所在地	会員数	組合長	創立年月日
全国農民組合	14組合・893人	人		
群馬県連合会(旧全日農系)	前橋市	743	須永 好昭	2. 2. 25
群馬県強戸村	新田郡強戸村	495	"	大正10.11.15
生品支部	" 生品村	47	塚本清太郎	15. 9. 20
大入連小作組合	北甘梁郡勢野村	12	向井 非作	14. 9. 1
赤堀支部	新田郡水崎町	38	大川 作麻	15. 12. 7
京ヶ島支部	群馬郡京ヶ島村	42	松本 忠次	15. 10. 31
上新田農民組合	" 塚村	1	堀 忠次	15. 8. 24
北甘梁農民組合	北甘梁郡富岡町	53	大川 金七	昭和2.11.17
柔女支部	佐波郡柔女村	15	柴 勘 寺清	3. 1. 19
元井支部	勢多郡元井村	40	小堀嘉太郎	3. 1. 4
群馬県連合会(旧日本農民組合系)	群馬郡岩島村	150	吉田綱十郎	2. 3. 4
岩島村農民組合	" "	62	徳江 基七	大正15. 4. 15
倉賀野支部	" 倉賀野町	61	徳江 忠 康	15. 11. 3
芝根支部	佐波郡芝根村	27	杉本 孝一	昭和2. 5. 27
全日本農民組合	7組合・882人			
群馬県連合会	群馬郡明治村	882	大沢 忠七	大正15. 5. 17
行幸田小作組合	" 豊秋村	84	狩野明治郎	10. 10. 30
石原農事改良組合	" "	133	木村 宗吉	13. 12. 1
平田農民組合	" 古巻村	180	内島富常吉	13. 9. 14
八木原農民組合	" "	94	新井伝次郎	13. 11. 4
明治農民組合	" 明治村	251	大沢 忠七	13. 12. 1
有馬農民組合	" 古巻村	140	野口 弥八	13. 11. 8
日本小作人総同盟	山田郡毛里田村	436	小野 隆 浩	大正14. 1. 3
日本農民組合総同盟				
南毛支部	多野郡石町	15	新井喜代作	昭和4. 8. 4
合計	23組合	2,226		
その他の組合				
小作人組合	143組合・14,433人			
地主組合	9組合・816人			
地主小作人協調組合	83組合・10,844人			

「知事事務引継書」昭和4年9月による。

無産運動の分裂
 大正十年(一九二二)十月に大日本労働総同盟友愛会が日本労働総同盟を改称したことから、労働運動は友愛会当時の協調主義から労働者階級の権利保護へと階級の立場を鮮明にした。大正十一年四月には日本農民組合が結成され、労働運動・無産運動の組織的結束がおこなわれた。

系統別労働団体一覧

名称	所在地	創立年月日	組合員数
日本労働総同盟	7組合・576人		人
関東連労組			
岡毛支部連合会	高崎市	大正15. 3. 19	
藤岡支部	多野郡藤岡町	5. 10	157
大間ヶ支部	山田郡大間ヶ町	13. 2. 17	32
高崎合同労組支部	高崎市	4. 15	64
伊勢崎合同労組支部	佐波郡伊勢崎町	昭和5. 5. 11	48
関東交通労働組合	群馬郡澁川町	4. 10	195
前橋合同労働組合	前橋市	9. 24	80
全国労働組合同盟	2組合・28人		
関東合同労働組合前橋支部	前橋市	昭和4. 9. 1	20
戦後石村労働組合	新田郡藤塚本町	6. 4. 10改称 大正15. 4. 20	8
日本労働組合総評議会	2組合・275人		
桐生一般労働組合	桐生市	昭和5. 1. 3	15
桐生美術労働組合	"	4. 8. 1	260
日本労働組合全国協議会	桐生市	大正13. 3. 16	6
全国労働組合自由連合会	2組合・44人		
上毛印刷組合	前橋市	大正13. 11. 16	40
桐生支部	桐生市	昭和3. 5. 6	4
無所属	3組合・90人		
中野労働組合	山田郡梅田町	昭和5. 7. 31	40
元総社合同労働組合	群馬郡元総社村	9. 19	32
北毛大同志会	澁川町	6. 4. 16	18
合計	17組合		1,019

「知事事務引継書」昭和6年7月による。

この無産政党の分裂にもない労働組合・農民組合も分裂した(前ページ表、上表参照)。県内全体で小作人組合は一四三、組合員数は一万四四三三人いたが、全農民の一〇二%を組織しただけであった。組合員のうち、八五%は単独組合として個別の活動をおこない、のこりの全面組織に

212 昭和恐慌のなかで

212

加盟した一五%が分裂していたのである。左派の労働農民党は群馬郡岩島村(現、高崎市)・桐生市を中心とし、中間派の日本労働党(のちに全日農系)は新田郡強戸村を中心とし、右派の社会民衆党は多野郡藤岡町(現、藤岡市)の労働組合、旧民政党の桑島定助の地盤の勢多郡・群馬郡北部を中心とした。本県では無産運動家は農民組合所属が多く、労働運動の桑島定助の地盤の勢多郡・群馬郡北部を中心とした。

労働運動の情勢誌として、昭和三年(一九二二)十月三十日、「群馬戦線」が月刊で発行されたが、三号で終わった。編集長は強戸村の菊池光好、日本労働党系の雑誌であった。これに対抗して同年十一月、社会民衆党系の雑誌「上毛大衆」が刊行された。この雑誌は月刊で、発行所は佐波郡茂呂村今泉(現、伊勢崎市)の上毛大衆社、発行・編集・印刷人は菊池重作、同人は尾池真弓・田村栄太郎・岩丸波太郎・小林邦作・遠藤可満・弥勒寺清ら二人である。群馬青年共産党事件に連座した社会主義者を中心として組織されたといえよう。創刊号(四〇ページ)は、伊勢茂呂人「悪税撤廃運動を巻き起せ」、尾池真弓「大衆講座、無産政党の話」、田村栄太郎「震動の研究」、小沢三詩などを掲載した。昭和五年(一九三〇)八月に「宣戦」と改題したが、禁処分を受けた。発行部数は一〇〇〇〇部、うち有償が七〇〇部であった。

同志は社会主義の基礎理論の解説、文芸欄の設置など、一般に読みやすくする配慮がされている。社会主義の啓蒙をおこない、政治・社会体制を批判した。社会主義が県内かなり広範に浸透していたことを示している(倉喜好「近代群馬の行政と思想」その四)。

本県の無産運動は弾圧と分裂にもかかわらず、昭和恐慌後、無産者の生活の窮乏を解決するために活動し勢力を拡大した。昭和六年(一九三二)の全国農民組合群馬県連合会の所属組合は、強戸をはじめ二四支部・一八三〇人、そのほか支部準備中、影響下にある単独組合などを加えると、二五八〇人であった。前年に比較すると約三倍に増加している。同年三月の第一回大会で採択した運動方針では、土地取上げ・立業立毛差押え反対が強調され、恐慌の深刻化にもない、小作地の確保を強く訴えた。また、帝国主義戦争反対を、満州事変のはじまる直前に主張したのは注目される。しかし、翌年四月の第二回大会では、満州事変勃発にもない、

214

無産政党支部一覧

名称	所在地	創立年月日	党員数	主幹者
社会民衆党	12支部・572人			
群馬県連合会	前橋市	昭和3. 12. 3	572	助 満 作 松 作 郎 平 野 七
前橋支部	"	12. 24	30	定 可 邦 喜 真 次 郎 藤 原 忠 次 郎 藤 原 忠 次 郎 藤 原 忠 次 郎
伊勢崎支部	佐波郡茂呂村	11. 20	60	桑 遠 小 野 藤 原 池 島 藤 原 池 島 藤 原 池 島
多野支部	多野郡藤岡町	4. 1. 21	98	4. 1. 21
高崎支部	高崎市	1. 26	80	小 野 藤 原 池 島 藤 原 池 島
桐生支部	桐生市	10. 16	50	藤 原 池 島 藤 原 池 島
勢多支部	前橋市	5. 3. 23	172	藤 原 池 島 藤 原 池 島
勢多西部分会	勢多郡富士見村	3. 12	120	藤 原 池 島 藤 原 池 島
勢多北毛分会	" 横野村	4. 20	40	藤 原 池 島 藤 原 池 島
勢多南部分会	" 木瀬村	4. 22	12	藤 原 池 島 藤 原 池 島
吾妻支部	吾妻郡岩島村	8. 1	31	唐 沢 沢 次 郎
群馬郡支部	群馬郡澁川町	9. 17	51	大 沢 忠 次 郎
全国大衆党	11支部・664人			
群馬県支部連合会	新田郡強戸村	5. 8. 28	664	須 永 音 十 郎 大 川 金 丸 小 堀 川 野 吉 平 吉 野 長 兵 衛 谷 松 正 重 山 田 出 田 大 部 矢 内 大 幸 作 矢 内 大 幸 作 矢 内 大 幸 作
強戸支部	"	8. 10	102	大 川 金 丸 小 堀 川 野 吉 平 吉 野 長 兵 衛 谷 松 正 重 山 田 出 田 大 部 矢 内 大 幸 作 矢 内 大 幸 作
生品支部	" 生品村	8. 16	40	大 川 金 丸 小 堀 川 野 吉 平 吉 野 長 兵 衛 谷 松 正 重 山 田 出 田 大 部 矢 内 大 幸 作 矢 内 大 幸 作
元総社支部	群馬郡元総社村	9. 10	7	大 川 金 丸 小 堀 川 野 吉 平 吉 野 長 兵 衛 谷 松 正 重 山 田 出 田 大 部 矢 内 大 幸 作 矢 内 大 幸 作
前橋支部	前橋市	8. 18	90	大 川 金 丸 小 堀 川 野 吉 平 吉 野 長 兵 衛 谷 松 正 重 山 田 出 田 大 部 矢 内 大 幸 作 矢 内 大 幸 作
中野支部	邑楽郡中野村	8. 16	150	大 川 金 丸 小 堀 川 野 吉 平 吉 野 長 兵 衛 谷 松 正 重 山 田 出 田 大 部 矢 内 大 幸 作 矢 内 大 幸 作
丹生支部	北甘梁郡丹生村	8. 24	14	大 川 金 丸 小 堀 川 野 吉 平 吉 野 長 兵 衛 谷 松 正 重 山 田 出 田 大 部 矢 内 大 幸 作 矢 内 大 幸 作
梅田支部	山田郡梅田村	8. 1	40	大 川 金 丸 小 堀 川 野 吉 平 吉 野 長 兵 衛 谷 松 正 重 山 田 出 田 大 部 矢 内 大 幸 作 矢 内 大 幸 作
桐生支部	桐生市	6. 1. 6	67	大 川 金 丸 小 堀 川 野 吉 平 吉 野 長 兵 衛 谷 松 正 重 山 田 出 田 大 部 矢 内 大 幸 作 矢 内 大 幸 作
笠懸支部	新田郡笠懸村	1. 27	80	大 川 金 丸 小 堀 川 野 吉 平 吉 野 長 兵 衛 谷 松 正 重 山 田 出 田 大 部 矢 内 大 幸 作 矢 内 大 幸 作
高瀬支部	北甘梁郡高瀬村	4. 4	74	大 川 金 丸 小 堀 川 野 吉 平 吉 野 長 兵 衛 谷 松 正 重 山 田 出 田 大 部 矢 内 大 幸 作 矢 内 大 幸 作
労働農民党	7支部・84人			
群馬県支部連合会	群馬郡倉賀野町	5. 12. 20	84	吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明
前橋支部	前橋市	3. 3	7	吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明
桐生支部	桐生市	3. 21	15	吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明
倉賀野支部	群馬郡倉賀野町	3. 6	13	吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明
富岡支部	北甘梁郡富岡町	5. 16	13	吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明
北群馬支部	利根郡沼田町	6. 1. 3	12	吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明
高崎支部	高崎市	6. 12	24	吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明 吉 田 綱 十 郎 小 林 正 明
地方無産政党	8団体・2,830人			
新興政治連盟	群馬郡元総社村	5. 3. 10	50	立 見 市 郎 立 見 市 郎 立 見 市 郎 立 見 市 郎 立 見 市 郎 立 見 市 郎 立 見 市 郎 立 見 市 郎
群馬県窮乏打破連盟	前橋市	9. 8	737	立 見 市 郎 立 見 市 郎 立 見 市 郎 立 見 市 郎 立 見 市 郎 立 見 市 郎 立 見 市 郎 立 見 市 郎
統一青年連盟	山田郡毛里田村	11. 28	135	立 見 市 郎 立 見 市 郎 立 見 市 郎 立 見 市 郎 立 見 市 郎 立 見 市 郎 立 見 市 郎 立 見 市 郎
三党合同群馬県協議会	前橋市	6. 6. 23	18	立 見 市 郎 立 見 市 郎 立 見 市 郎 立 見 市 郎 立 見 市 郎 立 見 市 郎 立 見 市 郎 立 見 市 郎

地方無産政党はおもなものを示した。「知事事務引継書」昭和6年7月による。

213 昭和恐慌のなかで

帝國主義戦争反対のスローガンは掲げられなかった。

昭和六年（一九三二）七月、日本大衆党と労働農民党が合同して全国労働大衆党、翌七年八月、社会民衆党と全国労働大衆党が合同して社会大衆党の群馬県連合会が結成され、県内の無産勢力の統一がおこなわれた。この統一によって、六年から七年にかけて無産運動は盛りあがった。

昭和六年九月六日、伊勢崎の共栄館で、社会民衆党支部を中心とした文化団体が文芸講演会を計画した。講演者はプロレタリア文学の小林多喜二・中野重治・村山知義ら六人であった。ところが、伊勢崎署は無届集会との理由で、開会前に講師全員と、菊池邦作ら主催者の中心的青年を検束してしまつた。会場に集まつてきた聴衆は、警察の不当な強圧をなした。また、全県の農民組合や無産政党も応援に駆けつけたので、人数は約五〇〇人を超え、かれらは伊勢崎署に殺到し釈放を要求した。この結果、検束者は翌朝釈放する、この騒ぎに関して逮捕者はださないと条件で妥協が成立し、講演者などは無事釈放された。

さらに、無産運動は市民運動にも進出し、昭和七年（一九三三）一月には伊勢崎で関東消費組合連盟に所属する店舗を設置し、無産者のために食料品を中心に供給した。県内でははじめての消費組合運動であった。七月には、高崎で無産者診療所が設置され、実費で無産者を診察した。左翼劇場の新築劇場団の小移動演劇隊が吾妻郡中之条町・群馬郡古巻村（現、渋川市・京ヶ島村）などで、「プロバ」や「世界の子供、手をつなげ」を、当局に秘密裡に公演したのもこの月であった。

メーデーも盛大におこなわれ、昭和七年の前橋のメーデーは戦前でもっとも大規模なものになった。約三〇〇人が前橋公園に集合して、警察隊に検束されながらも、「あらゆる自由を獲得すべく、光輝ある大旗を先頭に敢行する」とメーデー宣言をおこない、労働歌をうたいながら市内をデモ行進した。

この資料は、「伊勢崎事件」の記載は一段落六行に過ぎません。しかし、その準備をした「社会民衆党支部を中心とした文学団体」という記述の実態が、前段の記述や表などから読み取ることができます。「系統別農民組合一覧」の「采女支部」の「組合長」は「弥勒寺清」で、菊池敏清宅の茶話会に出席しています。また、「無産政党支部一覧」を見ると、伊勢崎町、茂呂村等の地域には、社会民衆党の「伊勢崎支部」しかありません。昭和六年七月の数字で本事件と非常に近い時期です。所在地は「茂呂村」で、主幹は「小林邦作」つまり、「菊池邦作」です。60人の党員がいます。本事件の昭和六年にかけて、月刊の『上毛大衆』を昭和三年12月から昭和五年8月まで発行しています。発行部数が1000部でした。また『戦旗』の定期購読が50部あり、最高時150部という『随筆柿』の記述を重ねれば、主催者グループの特徴も見えてきます。

1931年（昭和6年）

9 石原証明監修「世相のみえる町並」（『写真集・群馬世相1000年』、1992年）

世相のみえる町並
二事件と続き、多くの活動家が検束された。昭和六年、伊勢崎警察署占拠事件がおこなった。文化団体の呼びかけで、小林多喜二や村山知義、中野重治らの文芸講演会を伊勢崎の共栄館で開く予定だった。計画を察知した警察は事前検閲官を準備会場に派遣して、無届集会の理由で関係者

10 「1931年作家小林多喜二検束」（『群馬の20世紀―上毛新聞で見える百年』所収、2000年）



群馬中央銀行の重役会を一月九日開催、行名改称を決議した。それによると、行名は来る十五日の総会を経て、中央の二字を削除し、群馬銀行と呼ぶこととなる。実施は三月一日より。（1・11）

県下に大地震

死者五、重傷二十名 平坦部に家屋倒壊等続出

九月十一日午前十一時、うと若上り、昼食間近の十九次宮本県下を襲った大地震。震源地、埼玉県熊谷町。北前橋、高崎、桐生等の三市を跨北甘栗、多野、群馬佐佐木、平坦部一帯に家屋土蔵、煙突の倒壊、橋梁道路の損傷、電信、電話の故障を繰出し、五名の死者、三十名の重軽傷を出した。随所に砂塵濛々（もうも）

九月六日、東京から来たナツプ作家、小林多喜二氏ほか数名および佐波節内、無産党員、小林邦作氏ほか

と襲来する余震に、人心恐ろしく、先年の大震災も数ヶ所及び引続き頻々を想起した。（9・23）

釈放願ひの前に東京へ送還
数名の検束騒ぎについて、その理由は、伊勢崎署で絶対秘密にしているのだから

なほ、七日前八時頃、石井繁丸氏が代表者が釈放願ひに出頭する前に、自動車で本駅前に送り、東京に帰還、釈放したものと解せらる。郡内党員は、遅くも正午頃までに釈放される模様であった。（9・8）

この資料は、当時の新聞そのままではなく、当時の紙面をいかしつづ、まとめてあるものです。記事の一部を紙面の都合上移動しました。



小林多喜二
〔事件と騒動〕より

伊勢崎の文芸講演会には、小林多喜二・村山知義・中野重治を初めとしてほかに三人を招く予定であった。当時全国的に有名なナップ作家を招く計画ができたのは、伊勢崎の地域に、無産青年やナップ会員がいて、ナップの機関誌『戦旗』が毎号五

11 関口正己「戦禍の中の暮らし」(『思い出のアルバムさよなら群馬の20世紀』所収、2000年)

戦争は県民の暮らしを脅かした。戦争はいつの時代も人々の生活を圧迫し自由を奪ってきた。昭和六年、満州事変の年には伊勢崎で予定されていた左翼文芸の小林多喜二や中野重治等の講師が逮捕される事件が起き、十一月には県内の左翼系教員も逮捕・免職などの弾圧を受けている。戦争への序奏ともいえる布石は厳しい言論封じから始まっていた。後に教員赤化事件と呼ばれる昭和八年の事件も小学校訓導の検査となった。この年は前橋地裁で治安維持法による有罪判決もあり、思想弾圧の嵐はさらに厳しくなった。太平洋戦争に突入すると、物資の欠乏や徴兵が家庭を直撃し、県民は疲弊の辛苦を強いられた。

12 石原証明「伊勢崎警察署が占拠される」(『ぐんまの昭和史(上)』所収、2003年)

(四) 伊勢崎警察署が占拠される

ナップ作家の文 昭和三年六月、治安維持法が改悪され、違反した場合の刑罰に死刑・無期刑 芸講演会を計画 が加えられた。共産主義を初めとする社会主義運動の高揚に対処するためであり、さらに踏み込んで、大衆運動や人道的見地から社会問題に取り組む人達にまで対象が広がるようになった。

昭和六(一九三二)年九月六日、この日は伊勢崎の共栄館で、無産青年同盟有志の主催によるプロレタリア作家文芸講演会が開かれることになっていた。無産青年同盟は「無産青年」という機関誌を持ち合法的な活動をしていた。また、伊勢崎の地区には、通称「ナップ」と呼ばれる組織の支部があった。「ナップ」とはプロレタリア作家同盟のことで、北洋で働く悲惨な漁民のことを書いた『蟹工船』で有名な小林多喜二や、新劇の村山知義、詩人の中野重治などが中心になっていた。

ぐんまの昭和史(上)

〇部くらい送られ配布されていたというところがあり、伊勢崎は活動の先進地域であったのである。中央の人物を伊勢崎に呼ぶことを要請したのは、地元ナップ会員の菊池敏清たちであった。これまで、こうした中央の人物がそろったことはなかっただけに、人々の関心は強かった。一枚二〇銭の前売り券は飛ぶように売れた。当日、共栄館には二〇〇余名の人が詰めかけたという。

茶話会無届けを理由 ナップ作家の講演会が、大々的に開か 講師たちを検束 れるということは、治安当局にとって 快いことではなかった。治安維持法も強化されたことであるし、社会主義的な色彩を持つ行事や 催しは極力抑え、講演会が開催できないように策をめぐらしていたのである。

講演会の日、菊池盛男と菊池敏清は講師を迎えに、高崎線の本庄駅に行った。そこから上り線に乗り深谷駅で降りて下り線に乗り換えた。その車内で小林多喜二たちの講師を見つけ、彼らを案内して本庄駅にもどった。本庄駅には埼玉県警の特高刑事(治安・思想を担当する特別高等警察の刑事)が来ていた。緊張した空気が流れたが、特高刑事はその場を去っていった。何かあり そうな予感があったが、菊池たちは講師を案内して伊勢崎に入った。

一同は午後一時ごろ菊池敏清の家に着いた。ここで茶話会を開き、その後文芸講演会に移る予定であった。茶話会には伊勢崎地区の活動家二〇〇〜三〇〇人が集まった。この茶話会で、小林多喜二は「台所と文学」という話をした。人々が期待した社会主義関係の話は出なかった。終わって、菊池盛男の家に行き夕食をたべて菊池敏清の家にもどった。

ここで事件が起こった。トラック二台に分乗した武装警察官二〇〜三〇人が、菊池敏清の家に殺到し、小林多喜二一行をすべて検束してしまつた。無届け集会ということが理由であった。共栄館の文芸講演会は届けが出されていたが、茶話会は届けが出されていなかったからである。お茶を飲むという日常的行われる些細なことを理由にして、関係者を検束したのであるが、本当のねらいは、文芸講演会を潰すことであつた(『事件と騒動』)。

夕食の場所となつた菊池盛男の家では、盛男が後片づけをしていたため、菊池敏清の家へ行くのが一同より遅れた。それが盛男の検束をまぬがれさせた。彼らは多喜二らが警官によつて検束されたことを知らせるため、すぐ共栄館に駆けつけた。共栄館にはすでに聴衆が集まっていた。壇上にのぼり事態の経過を伝えようとしたが、警官は菊池盛男を取り囲み、彼の行動をさえぎった。これを見ていた聴衆は総立ちになり、警官に向かって非難の声を浴びせた。しかし、菊池盛男も検束されてしまつた。検束され伊勢崎警察署まで連れて行かれる盛男のあとに、一五〇人余の聴衆が続き盛男を激励した。



「ナップ」の機関紙『戦旗』
〔事件と騒動〕より



伊勢崎警察署 (昭和6年当時のもの)
(伊勢崎市立図書館提供)

署が民衆に占拠されるということは大失態であった。県警察の泉特高課長が直接指揮を執り、陣容を立て直した警官隊が伊勢崎警察署に押し寄せ、占拠していた民衆を強力に排除する行動に出たのである。またもや大乱闘になった。警官の帽子が飛び肩章がもぎ取られたという。乱闘の結果、石井繁丸・遠藤可満・吉田庄蔵・沢沢広吉らが代表になり、県警察と交渉し、検束された者の釈放を要求した。警察側も警察署が占拠されるという大事件に発展した民衆の力を認めざるを得ず、些細な理由で検束した者の留置を続けることはできなかつた。「講師を釈放すること、主催者側は一人を残し全員釈放すること、この事件で犠牲者を出さないこと」の三条件で妥協が成立した。なおこの事件の真相は双方とも新聞発表しないことが付け加えられた(「事件と騒動」)。翌九月七日の午前二時頃、警察を占拠した民衆は引き上げた。新聞発表しない条件であったが、九月八日の上毛新聞は「ナツプ作家検束騒ぎ」と事件のことを報じているが、警察署が占拠されたということは書かれていなかった。

この事件は、五〇〇人もの民衆が権力の象徴である警察署を占拠したというまことに珍しい事件であった。しかも一人の犠牲者も出さなかつた。国家権力による社会主義者や労働運動家への厳しい弾圧が次第に強まっていた当時、考えられないようなことであつた。県議員の選挙運動期間と重なり、社会主義思想を持つ尾池真弓・大島義晴・立見末市が立候補していた。ナツプ作家の文芸講演会は県議員の選挙とは直接的にはつながらないが、民衆に大きな影響を及ぼすであろうことを、治安当局は恐れたのであつた。

講演会は代理弁士を立てて続けることになった。この時の代理弁士に、後の佐田建設の社長や自民党の参議院議員になった佐田一郎がいた。彼はこの頃、須永好らの影響を受け農民運動や小作争議に活躍していたのである。しかし、「弁士中止」の警察命令が出され、講演会はほとんど続けられないようになってしまった。こうした混乱の中で、全県下から同志を呼び集める取り組みがおこなわれた。この取り組みは、新田郡の強戸村をはじめとする全県の農民組合や、無産者団体の事務所に通話でおこなわれた。連絡を受けて伊勢崎に急遽駆けつけたのが、遠藤可満・石井繁丸(当時弁護士)のちの前橋市長)・堤源寿・坂内一登司・遠藤一郎たちであつた。遠藤可満は勢多郡粕川村で、尾池真弓の県会議員選挙の応援演説をしていたところであつたが、連絡を受け急いで三〇〇四〇人をトラックに分乗させて、伊勢崎の共栄館に駆けつけた。

伊勢崎警察署 この時、講演会場の共栄館には約二〇〇人の聴衆がおり、各地から動員されてきた署を占拠した人は三〇〇人ほどであつた。情報網がまだ余り発達していなかつた当時としては、かなりの数であつた。彼らは「講師奪還」を叫んで、伊勢崎警察署に押しかけた。激しい交渉がおこなわれ乱闘に発展した。多数の民衆と少数の警官、警察は多数の力を抑えることができず、まもなく警察署は民衆によって占拠されてしまった。革命歌が警察署の中に響いたという。伊勢崎警察署の占拠は長くは続かなかつた。県の警察本部が乗り出してきたのであつた。警察

署に押しかけ、そこを占拠したというまことに珍しい事件であつた。しかも一人の犠牲者も出さなかつた。国家権力による社会主義者や労働運動家への厳しい弾圧が次第に強まっていた当時、考えられないようなことであつた。県議員の選挙運動期間と重なり、社会主義思想を持つ尾池真弓・大島義晴・立見末市が立候補していた。ナツプ作家の文芸講演会は県議員の選挙とは直接的にはつながらないが、民衆に大きな影響を及ぼすであろうことを、治安当局は恐れたのであつた。

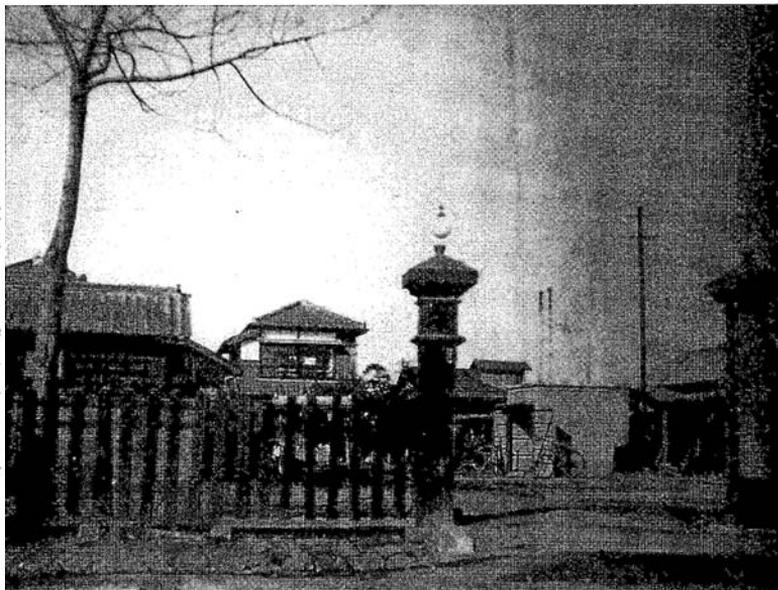
世の中の状況

昭和六(一九三二)年 九月十八日、柳条湖事件おこり戦争始まる(満州事変)。当時世界最長の清水トンネル(上越線)が開通する。紙芝居「黄金バット」はやる。流行語は「テクシー」、「いやじゃありませんか」、「生命線」など。古賀政男作曲で藤山一郎が歌った「酒は涙か溜息か」、「丘を越えて」が大流行。古賀メロディがはやる。ほかに流行した歌は「侍ニッポン」、「ルンペン節」、「私この頃憂鬱よ」など。映画

では「マダムと女房」、「女給」、「栄冠涙あり」、「巴里の屋根の下」などが人気。出版は野村胡堂の「銭形平次捕物控」、永井荷風の「つゆのあとさき」、長谷川伸の「一本刀土俵入」、「少年倶楽部」で田河水泡の「のらくろ二等卒」の連載が始まる。



伊勢崎警察署占拠事件の新聞記事
(前橋市立図書館所蔵
〔上毛新聞〕昭和6.9.8)



伊勢崎警察署(伊勢崎市・昭和6年)9月6日、佐波無産青年主催の文芸講演会のため小林多喜二、村山知義らが来伊。その茶話会が無届け集会だとして講師、主催者らが検挙された。聴衆ほか県内の無産運動家も駆けつけ、検挙を不当として警察署に押し寄せ、手薄だった警察署が一時的にせよ大衆に占拠されるという事件が起こった。大正15年12月以来、仮庁舎として使用されてきたこの建物は、昭和11年に取り壊され(一部は幼稚園の園舎に移築)、翌12年10月に新庁舎が完成した。(伊勢崎市図書館提供)

伊勢崎事件 いせさきじけん 小林多喜二らの講演会問題から発生した伊勢崎警察署襲撃事件。1931(昭和6)年9月6日、伊勢崎の社会民衆党支部を中心にした文化団体は、共栄館にプロレタリア作家の小林多喜二、劇作家の村山知義、中野重治らを招いた文芸講演会を計画し、県議選に備えて革新気運を盛り上げようとした。この動きを察知した警察は、トラック2台に分乗した警官隊20~30人を、茶話会を開いていた菊池敏清の家に派遣、無届け集会という理由で一斉検束を行った。検束されたのは講演会の講師全員と菊池邦作、斎藤力らこの地方の急進的青年であった。この情報は直ちに全県の農民組合や無産党の選挙事務所に流され、遠藤満、石井繁丸、佐田一郎、堤源寿、坂内一登司、遠藤一郎ら当時の無産党の指導者が続々と集まった。全県から馳せ参じた300人と、講演を聴こうとして共栄館に集まっていた聴衆200人は合体し、「講師奪還」を叫んで一斉に伊勢崎警察署を襲撃した。選挙で手薄だった警察は不意をつかれ、占拠された。のち、石井繁丸らの代表団と泉守熙特高課長の間で交渉が行われ、講師らの釈放と、この騒動で犠牲者を出さないなどの条件で妥協が成立した。
(石原征明)



⑥ 事件再発掘叙述・研究資料

1 藤田廣登「多喜二をかえせ！伊勢崎署包囲・奪還事件」

（『小林多喜二とその盟友たち』所収、2007年）

③ 多喜二をかえせ！——伊勢崎署包囲・奪還事件

官憲横暴！多喜二をかえせ！ 深沢たなほは警察署をとりまく群衆のふくれ上るものが留置場の中でもとどろくようにわかりました。この時、多喜二はあらためてたなほに支えられて、自分の身を再発見したに違いありません。この道を行こう。何處も及ぶべきこの道を行こう。

新進作家・小林多喜二（要る） 一九三二（昭和六年）九月、二五日投票の県会議員選挙へむけて、群馬県各地では選挙の前哨戦としての演説会が各地で開かれ、それにあわせて伊勢崎では無産政党の社会民衆党支部を中心とした文化団体を組織する青年を中心に文芸講演会が準備されてきました。この講演会の講師に小林多喜二、中野重治、村山知義、女優の三好久子らに白羽の矢が立てられました。「小林多喜二 行来たる！」の報は群馬県下一田で評判をよび、いま評判の新進作家を見た、話を聞きなさいと、一枚二〇銭の前売り入場券二五〇枚が完売され九月六日演説会を見た、話を聞きなさいと、多喜二一行は高崎線本庄駅で下車、待ち構えた埼玉興特高警察の妨害をふりきってタクシーで利根川をわたり伊勢崎町をめざしました。午後一時、事前の茶話会会場である佐渡郡茂呂村（現伊勢崎市）の大地主・菊池敏清宅に到着しました。多喜二ら男性は全員白紙の着流しであぐらをかいて茶話会にのぞきました。多喜二の話は「台所と文学」という題で当日の講演予定の内容に沿った一時間ばかりのものであったといわれています。



多喜二が検束された菊池敏清宅（伊勢崎市南千木町、現存）

下の活動などの話を聞きたいという思いがあったようです。これはに理由がありました。当時、この地域は群馬県内でも屈指の養蚕地で農民運動が盛んでした。すでに共産党員や活動家のグループが存在し、「ナップ」全日本無産者芸術団体協議会の新進、中堅作家などが講師に選ばれたにはこうした力があざかっていました。この時、多喜二らを招請したのは、ナップ会員の菊池敏清でした。多喜二らの伊勢崎行はこうして実現したのです。

検束 事前の茶話会はこうして進行し、遅めの昼食をとって夜の講演会にぞむこととなりました。昼食は近々の菊池敏清方であり、再び敏清宅に戻ったところ突然庭先から二台のトラックに分乗した武装警官一〇〜三〇人が突っ込んできたら大騒ぎとなったのです。多喜二をはじめ講師陣、居合わせた活動家の殆どがその場で検束され伊勢崎署に拘

引されてしまいました。「無届け集会」という理由でした。

憤激の聴衆、警察署を包囲 いったい、聴衆は高崎、渋川、富岡、藤岡、沼田あたりの全県下から弁当持参で午前中から会場の伊勢崎町南町の共栄館（催物会場、現伊勢崎市緑町）に詰めかけていました。定刻の六時には聴衆は二五〇人を超え場外にあふれる状況でした。

定刻が過ぎたころ講師と主催者が検束されたという一報が会場に届きました。会場設立の中、食事のあと片づけをしていて検束をまぬがれた菊池盛男が演壇から詳しい報告をしようとして阻止する警官ともみ合いになり検束、署へ拘引されたのです。憤激の聴衆がその後について会場から約五〇〇〜六〇〇メートル先の伊勢崎署（現伊勢崎市大手町）へ向かいました。そのために「警官横暴！講師を返せ！」と叫ぶ大群衆が伊勢崎署内外にあふれ出しました。留置者側からも「早く出せ、届出済の講演会をつぶすつもりか」などと呼応しました。署外からは革命歌が聞こえ、夜になるに従って包囲する群衆がどんどんふくれ上っている様子が手に取るようになりました。それというのも当日は、各地で無産政党の演説会や決起集会が開かれており、佐渡郡下だけでなく電話で急を聞いて各地からトラックに分乗して抗議に駆けつける人びとも多数いたのです。

こうした状況に恐れをなした伊勢崎署員は、署長以下全員が署外に退去してしまい、群衆は署内に盛り込む状況になりました。そこに群馬興特高課長泉守紀が指揮する応援警官隊が到着し署内外で小競り合いとなりました。小競り合いは二時間余、繰り返し行われ、ボタンがらされ、帽子を奪われる警官が続出しました。一説には半鐘も鳴らされたといわれます。こうしている間に県下から非常召集された警官隊が続々と投入され、警察署を包囲していた群衆は、午前二時ごろには署外に押し出されました。

多喜二ら釈放かちとる こうした中で石井繁丸弁護士（戦後前橋市長）らが留置者の釈放を求めて交渉に入り、警察側もこれ以上騒ぎを大きくしては社会的な問題になると考え、妥協が成立しました。その内容は、①講師を全員釈放すること、②主催者側は責任者一人を残して全員釈放すること、③犠牲者を出さないこと、の三条件でした。なおこの事件の真相は双方とも新聞発表しないことが付け加えられました（戦後、菊池邦彦氏の執筆したものは「新聞発表をしない」ことも三条件の中に入っています）。

こうして多喜二ら講師陣全員は翌朝早く釈放され、再び群衆が押しかける前に車で本庄駅へ送られ帰京したのです。「首謀者」の一人と目された菊池邦彦だけが二日間留置されましたが、調書も取られずに釈放されて「事件」は決着しました。

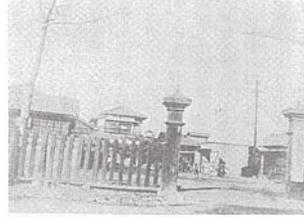
双方が新聞に公表しないことが条件でしたが、この騒ぎを聞きつけて「上毛新聞」が九月八日付けで記事しました。その見出しは「ナップ作家数名伊勢崎署に検束さる、署では理由を厳秘」代表者が伊勢崎署に出現、釈放方を陳情す」「検束者は既に東京へ送還」など警察奇りの表現となっていますが事実は見てきた通りです。事態を隠蔽し、体面を守りたい警察側からの一方的情報のリークによるものであることは一目瞭然です。

背景 この「事件」は、治安維持法下の時代、とりわけ「三・一五」「四・二六」事件後、弾圧のエスカレートの中で警察署を一時的に占拠し、犠牲者を出さずに検束者全員を釈放させるというその規模、内容において前代未聞の事件でした。

官憲側は、県議会議員選挙とは直接関係のないものの左翼の影響力を食い止めるため文芸講演会の成功をなんとかして阻止したかったと思います。そして講演会を阻止することには成功しましたが、結

果的にかえって県内のたかかう勢力と聴衆を結束させてしまったのです。これは県下の無産政党の前進、小作農民を結束した農民組合の前進、非法法下ではあったが生み出された出来事だったのです。その後、この地域の「戦旗」読者は最高時、五〇〇人を数えるまでに前進しました。

また、治安維持法下でも「届け出」を済ませた文芸講演会を、官憲が妨害して開催不能にした点で正義がたたかう勢力の側にあつたこと、逆に、正義の怒りに押され警察署を一時「占拠」されるといふ大失態を演じたことは誰の目にも明らかです。このことが、事態を主催者側とたたかう人びとと優位に解決させることにつながつたのです。



当時の伊勢崎警察署（伊勢崎市史）より。提供：群馬県立図書館

多喜二の一九三二年、当日の多喜二のテーマは「台所と文学」であつたといわれます。その内容は定かではありませんが、一九二八年二月の第一回男子普通選挙で多喜二自身が初めて大衆の前で演説した東叡知安会場で多喜二が想起されます。その時、彼はあがつてしまひながらも「台所と政治」ながつて、という話を一語一語命じやべつたのです。多喜二は聴衆のわかる話、聴衆の興味、関心を引き話題から入つて政治的関心を高める努力をしていました。それは彼が小樽の労働運動に参加していく中で身をもつて学んだことでした。当日の「文芸講演会」が成功していれば、多喜二はこうした切り口で

聴衆を惹きつけたことでしょう。

この伊勢崎「事件」の実体は、多喜二が豊多摩刑務所を出獄、七沢温泉で心身の傷を癒しつつ「オルグ」を執筆した後、杉並区馬橋に母セキさんを迎えてやや安定した生活を送つた時期で「都新聞」に「新女性氣質（のちに「安子」に改題）」を連載中で、ついで「転機期の人々」の執筆に入つていました。その直後の九月二〇日、上野で開かれた「戦旗の夕べ」でもまた検束されました。しかし、彼は伊勢崎署を深夜まで包圍した群衆の叫び声の中へ、人民の自分たちの期待をひしひしと感じ取つたでしょう。だから多喜二は、度重なる検束、勾留の中でもひたすら活動をつづけたいと目標に迫つていったのです。その直後に多喜二が敢然と日本共産党に入つていった背景にはこうした確信があつたと思います。つづく三年の文化団体への弾圧の中で地下活動に入つてもこの確信は揺らぐことはなかつたのです。

伊勢崎町、茂呂村にはこうした群馬県人民運動史に残る闘争を準備した多喜二の盟友たちがありました。文芸講演会に多喜二らを招致した菊池敏清は佐波郡茂呂村に於ける大地主・菊池家第二代当主で東大卒のナツブ会員、菊池盛男、盛男の従兄弟の菊池邦作などの活動家を中心にしていました。

菊池敏清は戦後早く率先して小作農地三〇町歩を無償解放して話題をよびました。多喜二らが検束された場所、菊池敏清の家宅は広大な敷地の中に蔵とともに無人のまま現在も残されています。この歴史的事件を見ていた築一五〇年を越える大邸宅はやや土台地み、屋敷の重みによく耐えています。何とか保存するべきなのどうか気がかりです。写真。

事件の「首謀者」の一人と目された菊池邦作は幼くして父母と離別するという運命をすごし、養

が盛んなこの地から東京高等蚕糸学校（現東京農工大学）に進学、その時代にマルクス主義の洗礼を受けた。婦郷し蚕種製造に力を尽くしつつ活動を続けました。そのために戦前七、八回もの検束・投獄をうけましたが屈せず頑張りました。この日、多喜二に「蚕種製造業 小林邦作」の名刺を差し出しています。小林邦作に養子入りしてためたのです。多喜二は、私は名刺を持っていませんの、といふ邦作の名刺を袂に入れました。その後も活動を止めなかつた邦作は、蚕種の仕事を続けられなくなり上京します。戦後、この「伊勢崎署包圍、多喜二奪還闘争」の実証的掘り起こしのために尽力しました。



小藤はる子さん

茗荷汁をおかわり 事件当日、菊池盛男の妹で多喜二らに茗荷汁をふるまい直接会話を交わした小藤はる子さん（九五歳）が伊勢崎市内にご健在です。この朝のことを「ちようど晩秋蚕が二眠のときよく覚えていました。小林多喜二の一行が来るというので朝から家中で待つていました。田舎のことだから茗荷汁の卵とじがよろうとういうことになり用意して待ちました。多喜二さんは茗荷汁がうまいといつて喜び二杯もおかわりし、私にこの辺では茗荷がたくさんとのるのですか、と聞くから私が食べきれないほどとれます、と答えると多喜二さんは田舎はいいですねといつて笑つたのが忘れません」と、一九六七（昭和四二）年八月の「事件真相を語る座談会」に談話（要約）を寄せています。

二〇〇七年一月一六日、地元八田利重氏（前日本共産党伊勢崎市議会議員、早瀬演氏の案内で駒崎澄子さんと

もともとお目にかかりました。ご健康で耳が悪いほか生活には支障がないとのことでした。筆談でしたが小林多喜二との会話のことにしっかりとあらずや覚えていたことができました。

■フィールドワークノート

この事件は、小林多喜二の事跡の中で今日までほとんど脚光を浴びなかつたものです。多喜二の年譜にも、手塚英孝著の「小林多喜二」にもまったくその痕跡さえ見えない事件だったのです。もちろん現地の当事者の人びとは、戦前、わが郷土の先進的活動家たちがたかたか多喜二を護りぬいたという自負があり、語り継がれてはきました。しかし、今日ではこの事件を知る人びとは少なくなつています。

私がこのことを知つた発端は、小林多喜二の「オルグ」執筆行の神奈川県「七沢温泉・福元館」を「発見」した駒崎澄子さんからの照会からじまりました。駒崎さんは福元館の「自立する女性」の系譜——お母さん弁護士平山知子の周辺——という本に平山知子継父の菊池邦作の事跡として多喜二が群馬県伊勢崎で検束され、その奪還闘争のことが書かれているが事実関係はどうかというのでした。私は虚をつかれた感じでした。多喜二が上京して足を運んだ地は関東では神奈川県以外にないと思ひ込んでいたからです。

早速調査をして見ると「わが地方の日本共産党史」（前巻）一九八四年の群馬県版に「小林多喜二奪還」という小見出しの文章があり、地元紙「上毛新聞」記事、さらには県内の社会・労働運動史関係書、「群馬県史 通史編七」、「伊勢崎市史 通史編三」などにもそれぞれこの事件の記述が見られます。そこでこの事件の掘り起こしを進めている現地の関係者と協働して調査を行いました。本稿

略年譜

年	月	事項()
1903(明治36)年	10月	秋田県北秋田郡下川治村(現大館市)に、父末松、母セキの二男として生まれる。(11月平民社創立)
1907(明治40)年	12月	一家で小樽に移住。(1月世界恐慌)
1908(明治41)年	1月	小樽区若竹町に居住。伯父の菅む三屋(3)店支店をひらく。
1910(明治43)年	4月	小樽区立潮見台尋常小学校に入学。(5月大連事件)
1914(大正3)年		(7月第一次世界大戦)
1916(大正5)年	3月	潮見台尋常小学校卒業。
	4月	伯父の援助をうけ小樽商業学校に入学。伯父の家に居住。パン工場の手伝いをしながら通学する。
1917(大正6)年		校内に絵画サークルをつくり、水彩画を始める。
	12月	『尊商』創刊号12月号に「今は昔」(作文) (11月ロシア革命)
1919(大正8)年	4月	校友会雑誌『尊商』の編集委員に選ばれる。この頃より、詩、短歌、小品を書き始める。
1920(大正9)年		島田正策らと同覧文集『素描』を創刊。(5月日本初のメーデー)
1921(大正10)年	3月	小樽商業学校卒業。
	5月	伯父の援助をうけ小樽高等商業学校に入学。『小説倶楽部』に投稿を始め、10月号に「古い体操教師」。秋ごろから志賀直哉の文学を学び始める。(2月『種時く人』創刊)
1922(大正11)年	4月	小樽高商校友会誌の編集委員。『小説倶楽部』『新興文学』などに投稿を続ける。(7月日本共産党創立)
1923(大正12)年		『新興文学』1月号に「健」。
	11月	小樽高商の震災義捐外語朗読大会で、メーテルリンクの「青い鳥」に出演。(9月関東大震災)
1924(大正13)年	3月	小樽高等商業学校卒業。北海道拓殖銀行に就職。
	4月	同銀行小樽支店勤務。島田正策らと『クラレ』創刊。
	8月	父末松、死去。
	10月	このころ、不幸な境遇にあった田口タキを知る。(6月『文芸戦線』創刊)
1925(大正14)年	3月	東京商科大学を受験、不合格となる。ノートの原稿帳をつつて刻苦の努力を始める。
	12月	田口タキを救い出す。
	(4月治安維持法公布、5月普通選挙法公布、10月小樽高商軍教反対闘争など)	
1926(大正15)年	4月	田口タキを自宅に迎える。
	5月26日、日記「折々帳」を書き始める。葉山嘉樹「淫売娼」に感銘をうける。(5月小樽第一回メーデー)	

小林多喜二・略年譜(『ガイドブック小林多喜二の東京』から)

【資料提供】 八田利重(前日本共産党伊勢崎市議会議員)、早瀬演(日口親善資料センター)、半田正(治安維持法国際同盟群馬本部事務局長、平山知子(あしあ法律事務所弁護士)、崎崎澄子(民主文学会群馬県支部員、群馬県立図書館 ほか)

※1 一行のメンバーについては「東京朝日新聞群馬県版」(九月五日付)が「佐波無産青年主催の文芸講演会」は六日午後一時から伊勢崎共栄館に開催、講師は布施辰治、村山知義、小林多喜二、立野信之、岩藤雪夫、ほか女流作家等である」と報じています。中野重治年譜には九月七日検束の記載があり確認できましたが、布施、立野、岩藤などの参加者については確認できませんでした。

※2 湖池邦作は戦後この小集会について「茶話会」でこまめな報告をしてくれていたと反省の弁をのべています。

※3 養蚕地では春・夏・秋の三回の養蚕をしていてそれぞれ春蚕・夏蚕・秋蚕と呼称していました。また、蚕は何度目も脱皮して成長します。脱皮の直前には桑を食はずで停止します。この状態を眠吐といひ、四眼まで脱皮を繰り返します。

110

略年譜

1927(昭和2)年		科学的社会主義の学習を開始。『校友会雑誌』3月発行第38号に「人を殺す犬」。3月初旬より、磯野小作争議が小樽でたたかわれ、磯野側の情報を提供する。
	5月	田口タキ、行方を知らず小樽を去る。
	6月	下旬、小樽港争議を応援し、ピラの製作などに参加。
	8月	労働芸術家連盟に加盟。
	9月	社会科学研究会参加。労働農民党小樽支部、小樽合同労働組合の人々との関係を深める。
	12月	「防雪林」を起稿。(5月山東出兵)
1928(昭和3)年	2月	第一回普通選挙実施。労働農民党から立候補した日本共産党員の山本懸蔵の東俱知安方面の演説陣に加わる。
	3月	「3・15事件」。全日本無産者芸術連盟(ナップ)結成。
	4月	「防雪林」完成。
	5月	ナップ機関誌『戦旗』創刊。ナップ小樽支部を組織し、『戦旗』の配布を受けもつ。
	5月	中旬、上京して蔵原惟人を訪れる。
	8月	「一九二八年三月十五日」完成(『戦旗』11、12月号)。
	9月	「東俱知安行」完成(『改造』30年12月号)。
	10月	「蟹工船」起稿。
	12月	ナップ再組織され、全日本無産者芸術団体協議会(ナップ)成立。
1929(昭和4)年	2月	日本プロレタリア作家同盟創立。中央委員に選ばれる。
	3月	「蟹工船」完成(『戦旗』4、5、6月号)。
	5月	田口タキと再会。
	9月	「不在地主」完成(『中央公論』11月号)。
	11月	拓殖銀行を解雇される。
	12月	「工場細塵」起稿。(10月世界恐慌始まる)
1930(昭和5)年	2月	「工場細塵」完成(『改造』4、5、6月号)。

(東京時代)

年	月	事項()
1930(昭和5)年	3月末、上京。市外中野町(現中野区)上町に田口タキと住む。	
	4月	作家同盟第二回大会に出席。
	5月	中旬、『戦旗』防衛巡回講演で関西方面に赴き、備前、日本共産党資金援助の事件で大坂島之内警察署に検挙。
	6月7日	一旦釈放され、東京後再検挙。
	7月	「蟹工船」の表現問題で不戦罪の追起訴をうける。
	8月21日	豊多摩刑務所に収監。(不景気進行、倒産・失業激増)
1931(昭和6)年	1月22日	保釈出獄。

略年譜

3月	田口タキとの結婚を断念。七沢温泉「福元館」にこもり、4月初旬「オルグ」を完成(『改造』5月号)。	
6月	「独房」完成(『中央公論』7月号)。	
7月	作家同盟兼任中央委員、書記長に選ばれる。市外杉並町馬橋に一戸を借り、母セキ、第三吾と住む。	
8月	志賀直哉より長文の手紙がどくどく。『都新聞』に「新女性氣質」のち「安子と改題)の連載を開始(8・23-10・31)。	
9月	「転形期の人々」起稿(ナップ)10、11月号。『プロレタリア文学』32年1-4月号)。	
9月6日	群馬県伊勢崎で検束。文芸講演会聴衆が警察署を包囲し、多喜二らを奪還する。	
20	第2回「戦旗の夕」で講演。検束。	
10月	日本共産党に入党。	
11月	上旬、奈良に志賀直哉を訪ねる。(9月「満州事変」勃発、11月日本プロレタリア文化連盟(コップ)結成)	
1932(昭和7)年	3月	「沼尻村」完成(『改造』4、5月号)。文化連盟への大弾圧始まる。
	4月	上旬、宮本顕治らと非合法活動に移り、文化、文学運動の再建に献身的。中旬、麻布区東町に住む。伊藤ふじ子と結婚。
	7月	麻布新町に移る。日本反帝同盟の執行委員になる。
	8月25日	「党生活者」脱稿(『中央公論』33年4、5月号)。
	9月	麻布十番ヤマカヤフルーツバーにて母、姉弟らと会う。
	12月	第三吾と日比谷公会堂でシゲツェティのコンサートを観く。(5・15事件、犬養首相射殺される)
1933(昭和8)年	1月	「地区の人々」完成(『改造』3月号)。
	2月	麻布新町の家宅捜査をうけ渋谷区羽沢町へ移る。
	2月20日	正午すぎ赤坂福吉町付近で逮捕。築地署特高の拷問により、午後7時45分前田医院にて絶命。
	3月15日	全国的な労働葬が築地小劇場で行われる。(3月日本国際連盟脱退)

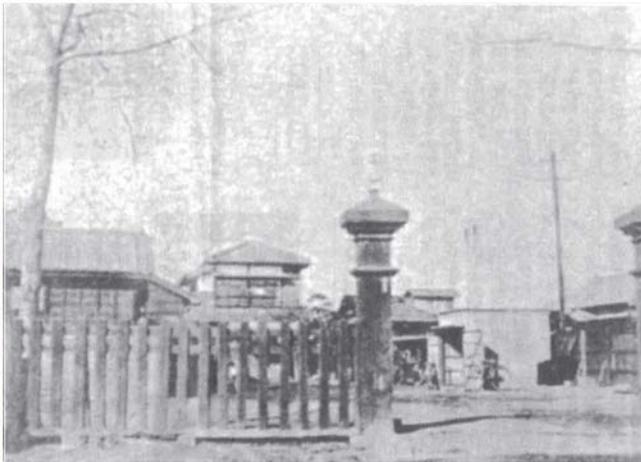
*本略年譜は、新日本出版社『小林多喜二全集 第7巻』の手塚英孝編「年譜」、同社『手塚英孝著作集 第3巻所収「小林多喜二」を主な参考文献とし、近年の研究で明らかになった事跡を追補して作成した。

民衆が多喜二奪還

検束された小林多喜二を、数百人の折騰で警察から奪還した事件があった。来年は「群馬」で知られる日本共産党作家、小林多喜二の生誕百五年、没後七十五年にあひます。館の年を前に、今更にもれてきた群馬・伊勢崎署占拠事件の全貌が明らかになります。(北村隆志)

群馬 伊勢崎署事件を発掘

JR伊勢崎駅が自動車であつたのは、大きな歴史的な見上げのような歴史です。『戦前』の大地主だった故・支部の創立者で、私の入党推薦者である。



●大衆に一時占拠された伊勢崎警察署(『伊勢崎市史』から)
●今は駐車場になっている伊勢崎警察署跡地



小林多喜二

「多喜二がここにきて検束されたんだと話してました」

聴衆50人占拠

一九三三年九月六日、プロレタリア文化運動に参加していた飯沼は仲間とともに支芸講演会企画。新進作家の小林多喜二が来るというので前売り券は売完してました。当日、小林多喜二、中野重治、村山知義ら六人の講師は講演会の前に飯沼宅で簡単な茶会を待ちました。ところが会場に向かおうとした午後六時ごろ、家の前に

突然二台のトラックが止まり、二、三人の警官が飛び降りてきて、講師全員と飯沼氏を含む十人伊勢崎署に運

その勢いに押された警察は署長以下全員が逃げ出してしまいい、かわりに班長が警察署を占拠してしまいました。このとき検束された二人に、平山知子弁護士の父親をおそれ、無罪放免を口実に、講演会を中止したのです。

二百五十人超会場の聴衆は、知らず聞かずに伊勢崎署におしよせ、「群馬騒動!」「多喜二を奪還」と叫びながら、警察署を包囲しました。

「そのうち、外からよくそつた革命歌の合唱の音が響いてきた。私も歌った。他の別からも力強い革命歌が洩れた。監獄場の中で革命歌



小林多喜二らが武装警官に検束された菊池敬清さん(右下、1941年ごろ)宅



多喜二の思い出話をする。小林多喜二さんを出した小樽は千代子さまは、翌朝の列車で東京駅に帰りました。伊勢崎警察署は戦後に移転し、当時の場所は駐車場になった。多喜二が夕食を出した小樽は千代子さまは、ウチの町で健在です。ミヨウウチの明とて、多喜二がうまいと喜んで杯食べたことをよく覚えている」と話します。

検束は4回に

伊勢崎署占拠事件は、『伊勢崎市史』や『わが地方の日本共産党史(群馬編)』がわずかに紹介していますが、小林多喜二の年譜・評伝では一切触れていません。今回、事件を発掘したのも、多喜二が泊まった七沢温泉・福元館の発掘から知られる神奈川県伊勢原市の鶴岡(かささぎ)登子さん、平山知子さんの伝記で父親の那作氏の名を聞き、調査を始めた。「多喜二はこんなことがあったのかと驚きました」と鶴岡さん。

これまで多喜二が警察に拘引・検束されたのは一回と考えられてきました。①一九二九年に小樽で②上京後、一九三〇年に大阪で(その後豊多摩刑務所に五月収監される)③一九三二年三月二十日に上野で講演中での

戦争勢力に反撃



平山知子さんの話。伊勢崎署占拠事件のこと、なかに「多喜二が占拠されたと言っていました。父も強圧を聞き受けた。戦争に国民をかたてた。事件から先人の活動のすばらしさをあらた

要を占拠される多喜二の戦術、女性を無権的に抑圧と民衆の抵抗の事実を発掘することは、新たな戦争を起すこととする。戦争に国民をかたてた。事件から先人の活動のすばらしさをあらた

読んだ。

『自立する女性の系譜―お母さん弁護士
平山知子の周辺』(一九七九年、光社刊)

平山さんが国政に出馬する時紹介するため
に書かれたという。題名が示す通り知子さ
んの母方の祖母、高橋光枝、父の菊池邦作、
母の弘子そして知子さんの夫の平山基生さ
ん、その母秋子、父照次そのまた父と母な
ど文字通り系譜を通じて社会背景とそれぞ
れの共産党員としてのまたはキリスト者と
しての生き方を綴ったものである。

私が注目したのはそのなかの「第二章
マルクス主義の洗礼」―にでてくる小林多
喜二奪還事件である。

一九二一年九月六日、菊池邦作(知子さ
んの父)らが小林多喜二たちを招いて文芸
講演会を地元の伊勢崎の共栄館で行なう予
定であったのを到着したその夕方講師全員
と主催者が突然検挙された。ここまでは戦
前の治安維持法のあるなかではよくある話
だが、わたしが驚いたのは怒った群衆が伊
勢崎署を占拠し、次のような条件で解決し
たことである。

- この事件で犠牲者を出さない。
 - 小林多喜二以下講師全員を釈放する。
 - 新聞発表しない。
- という信じがたい条件で警察に承諾させ

たことだ。一時的であるにもせよ民衆の力
が圧倒的に強くなければあり得ないこと
だ。

「小林多喜二奪還事件」とも「伊勢崎署
占拠事件」とも呼ばれた群馬ではかなり知
られた事件である。

稲沢さんの本には詳しく書いてあった
が、こうなるとうらうしても群馬へ行きたく
なかった。

日本共産党の群馬県委員会に電話をした
のは二〇〇七年九月のことだった。県委員
会の人を紹介してくれた人は二十三年間共
産党の伊勢崎市市会議員をされ、今年の春
引退した八田利重さんだった。

「四五年前だったら当事者のことを良く
知っている人がいたんですがねえ。残念で
すが亡くなってしまい、菊池敏清さん(多
喜二を呼んだ人)の家も奥さんが亡くなっ
てから無人になってしまいました。私はそ
の人たちから話しは聞いていますが、詳し
い資料を持っているのは他の人で……」

とおっしゃったが、私はほぼ強引にお会
いする日を決めていたのだ。この事件に
一歩近づいた気がし、うれしかった。

二〇〇七年九月、まだ猛暑が続く伊勢崎
へお邪魔した。伊勢崎市役所で待ち合わせ
た八田さんは電話の声から小柄な優しい感

じだったが、長身のがっちりした方だった。
日焼けした顔をほころばせて迎えてくだ
された。

八田さんのお宅には奥様と、資料を持参
して下さった早瀬演(ひろ)さんがいら
した。

『伊勢崎多喜二奪還事件』はこの地では
ほごりをもって言い伝えられています」
と早瀬さんは数冊の本と新聞切り抜き、
平和展示会で作った巻き物など見せてくだ
された。

八田さんは、
「伊勢崎は蚤の町だね。伊勢崎銘仙は有
名です。糸偏景気といわれ第一次大戦後、
一九二〇年までは好景気が続きました。こ
の辺でも機屋は八十軒以上あり、娘三人も
てば蔵が建つといわれたほどです」

と説明して下さいました。
早瀬さんからおかりした「事件と騒動
―群馬民衆闘争史」『群馬県社会運動物
語』によると、しかしこの景気は長く続か
ず、金融恐慌、経済恐慌がおこり、群馬に
もそれは押し寄せた。繭の価格の暴落で機
業は一九一九年以降漸減していく。農村は
窮乏し小作争議が増えた。全国の失業者は
三百万人といわれ労働争議が頻発におこっ
た。そのなかで労働農民運動が活発化し、

群馬ではなかでも須永好の指導した新田郡
強戸村の「無産村政」が有名である。

もともと群馬は古くから社会進歩の伝統
を持つ県だ。とくに高崎は交通の要所であ
り文化の中心地であった。キリスト者の内
村鑑三は高崎出身である。自由民権運動も
高崎、前橋を中心に盛んになった。有信
社等の結社が生まれ国会開設運動に加わっ
た。一八八四年群馬事件で武装蜂起による
現状打開の動きは秩父事件にも影響する
ほどだった。秩父事件では群馬から馳せ参
じた民衆は三〇〇人もいたという。渡良瀬
川流域の足尾銅山鉱毒事件で田中正造翁を
慕って協力したのもいた。

菊池邦作の著書『隨筆 柿』によると、
邦作は一九一九年に佐波郡茂呂村(現在の
伊勢崎市)に稲屋・蜜種養の家に生まれた。
多喜二より四歳上である。一歳で父を亡く
し、四歳で母と生き別れをしている。祖母
に育てられ、たいへんやんちゃな男の子
だった。貧乏な上両親のいない邦作は高等
小学校を卒業したら系糸問屋へ丁稚奉公に
行くはずであったが、叔父のはからいで「佐
波学館」という塾へいけるようになった。
ここを卒業すると上京して私立赤坂中学へ
入学し猛烈勉強して無試験で一九一九年に東
京高等蚕糸(今の東京農工大学)に入学し

伊勢崎における多喜二の足跡

蛭崎 澄子

二〇〇五年の秋に、日本民主主義文学会
の稲沢潤子さんから一冊の本をお借りして

た。ここでマルキシズムの洗礼を受けることになる。二年の時学生連合会に入り、治安警察法で二度も検挙された。高等査査を卒業して伊勢崎にもつた邦作は群馬青年社会科学研究会事件(群馬青年共産党)に連座して六カ月の未決生活を送った。富沢氏の『群馬県社会運動物語』によると、この事件は関東大震災の混乱に乗じて社会主義弾圧に使われた全国最初の共産党弾圧事件だったという。

一九三一年七月十五日に無産政党的同盟がはかられた。群馬では大衆党、労働党、そして邦作の属していた社会民衆党合同実現同盟などの三党合同大会が前橋市紺屋町において開催されたが、官憲は解散させてしまった。

そしていよいよ多喜二奪還事件となる。『随筆 柿』の本のなかで、戦後一九六七年に座談会をもち、当時事件にかかわった人たちが貴重な証言をしている。それによると、事件の経過は次のようである。

一九三一年九月二十五日は四年に一度の全国一斉府県会議員の選挙で、多喜二らが来た六日は舌戦の火ぶたがきられた最中だった。

多喜二らを招くことができたのは菊池敏

清の尽力である。敏清は菊池家十二代目の本家である。東大文学部在学中にナツプ(全日本無産者芸術団体協議会)の会員になり、伊勢崎に支部をつくるなどして文化の普及につとめた。『戦旗』は最高五百五十部も読者がひろげた。その敏清を文化人グループがげびつといつて多喜二らを招いたのである。中央も注目していた支部なので送ってくれたのだろう。講師陣は多喜二の他、中野重治、村山知義、と築地小劇場の女優三好久子ほか二、三名である。布施辰治、立野信之、岩藤雪夫の名も朝日新聞に出て

いるが定かではない。これだけの講師陣を集めたので一枚二十銭の前売券の三百五十枚は完売した。日時の正確なところは実は分かっていない。入場券がみつからないためである。参加者の記憶によると「呑竜様(どんりゅうさま)の祭りの日だとおぼえている人も多い。のちに警察が約束を破って「上毛新聞」に記事を書かせたところによると、九月六日になっている。

菊池盛男と敏清が武州ハイヤー二台を雇って本庄駅まで行った。到着を待たずハイヤーを駅前に待たせて上り列車に乗り込んだ。当時待ち合わせをする時は駅をすらして会うようにしていたから、深谷の駅までいってそこで約束の時間の下り列車に乗

り換え車中で将棋をしていた一行を見つ、案内して本庄駅に下車した。すでに特高刑事ふたりが待ち受けていた。一行が二台の自動車に分乗する、くだんの二人はひとりひとりその車に乗って戻ろうとしたのを追い払った。さすが帰つていったが早くも小林多喜二らの身辺には緊張した空気が醸し出されていた。午後一時ごろ、一行は茶話会会場である菊池敏清宅に到着。女優さんのをぞいてみな無造作な白耕の着流し姿で袴などはないいなかった。家に着くと多喜二は座敷の床柱を背にしてあぐらを掻き、火のない大きな火鉢を前にして腕組みをしていた。多喜二は「台所と文学」という題で一時間ほど話した。これは共栄館で話す内容であった。邦作の印象では多喜二は年よりずっとふけていてとも

二十八歳の青年には見えなかった。その実はこの茶話会にはもうひとつの目的がある、この地方の尖鋭分子二、三十人だけの集会を開き多喜二から非合法に関する話を聞こうという狙いがあったが、多喜二ほどの人物がそれに乗るはずがなく、後に無届集会という名目で警察が踏み込んで来たことを考えてもそれは甘い考えだった。その日の小集会に参加したおもな人は菊池盛男、敏清、渋谷広吉、吉田庄蔵(のちの潮

流社社長)、斎藤刃、竹内幸作、弥勒寺清、同撰三、岡田熟、岡宝司、島田登司、正金寺忠作、下田三、それに邦作である。組合人、農民、商人などの庶民やのちの会社社長や共産党町会議員など多彩なメンバーである。

邦作は「産種製造業 小林邦作」(当時小林と名乗っていた)という名刺を多喜二に出して自己紹介すると興味深そうに邦作の名刺に見入っていたがやがて邦作の顔を戻り、につこり突つて名刺を袂に入れた。その時「僕は名刺をもっていないので」と多喜二はいった。

多喜二の話の後、二人の作家が話し午後三時ごろ早い夕飯を食べるためにすぐ近くの菊池盛男宅へ行った。茗荷の味噌汁がうまいといつて大鍋の味噌汁がまたたくまになくなった。多喜二は二杯もおかわりをした。盛男の妹、小暮はる子の話によると、月日は晩秋蚤が一眠に入った頃だといふ。多喜二は背の高いやせ型の人という印象だった。多喜二から、

「この辺では茗荷がたくさんどれるのですか」

と聞かれ、

「田舎はいですね」と云つて笑つたという。

そして一行が敏清宅にもどつて一服していると、門の外が急に騒がしくなった。とたんに二台のトラックから制服制帽頸紐の武装警官が二、三十人突っ込んで来た。おきまりの大乱闘になったが網打尽、ほとんど全員が講師陣とともに検束されてしまった。

演説会場では定刻になつても始まらない講演会に聴衆は怒つていた。そこへ検束をまねがれた吉田庄蔵が、

「講師らをふくめ主催者も総検束をくらつた」と報じた。次に菊池盛男が演壇にかけあがつて詳しい説明をする、警官が駆け寄つて捕まえてしまった。

「警官横暴!」と警察まで百五十人もの人がついていったという。

残つた同志、弥勒寺撰三、斎藤力などが今後の善後策を練つた。まず全県下から同志を緊急動員すること、講演は続行することなどである。吉田庄蔵は電話を前橋の社大の事務所にかけて応援をたのんだ。弥勒寺は舞台にあがって詩などを朗読したが、中止になった。十三人くらいの弁士が中止をく

らつた。聴衆は講師を返せと警官に迫つた。十時ごろいったんひきあげ、楽屋で相談し

た結果、今夜十二時伊勢崎署に押しかけることにし、動員をかけた。電話で伊勢崎の事件を知った遠藤可満は県議会議員選挙の応援で大胡にいたがそれはたいへんというので三十人ばかりトラックに乗せシートをかぶせて西瓜の運搬と偽って馳せ参じたという。

渋谷弘吉は十一時半ごろ聴衆とともに警察へいくと県会議員選挙で手薄なこともあって、群集の力で警察を占拠してしまつた。そして渋谷は署長のイスに腰掛け「おれは署長だ」とおおいに気をよくした。仮庁舎の事務室をかたずけて机やイスは庭へかつぎだし、物置きから箆を引っぱり出して一同座り込んだ。その数二百人にもなつたという。期せずして革命歌がおこり、留置場にいる検束された者もその声に合わせて歌つた。庭では警察の自転車を用いて打ち込むまでいた。いったん引き揚げて警察が泉特高課長を先頭に逆襲してきた。乱闘は一時半ごろまで続き、警官の帽子や肩章がとられて川になげこまれた。警察側もメンツがあるので、話し合いたいと申しこんでいたので、主催者側も乱闘が目的でなく、講師など検束されたものの釈放が目だったのでそれに応じた。渋谷弘吉、石井繁丸弁護士（のちの前橋市長）、吉田庄

蔵と泉守照特高課長、伊勢崎署長が事態の收拾について相談した。はじめ警察側は強気だったが、占拠された弱味もあり、一人も犠牲者を出さない、全員夜が明けるまで釈放する、公にしない（新聞報道はしない）という条件で話し合いがついた。

講師らは七日早朝、本庄駅から東京へ帰された。主催者側も七日夕刻までには邦作をのぞいて全員釈放された。邦作は二晩置かれたが、その間「うな丼」まで出て、調書もとられず、調べもうけないで釈放された。

後日警察側は約束を破つて「上毛新聞」に自分達の都合のよい書かきたで発表してしまつた。

一九三二年九月八日「上毛新聞」には「ナツプ作家数名 伊勢崎署に検束される 無産有志主催の講演会を前に 一署では理由を厳秘」という見出しで、講演会が失敗に終わった、という書き方で報道している。警察が占拠されたことは一行も書かれていない。

「伊勢崎町無産党青年有志主催プロ作家文芸講演会は六日午後七時頃伊勢崎町共栄館に於て開会された彼（ママ）是れより先弁士として東京より村山知義小林多喜二中野重治三氏他ナツプ作家男女三名は自動車で

来崎し労働大衆党伊勢崎支部員小林邦作斎藤力菊池和義の諸氏と共に佐波郡茂呂村大字下茂呂同支部員菊池盛男氏方で晚餐を取り午後六時会場に赴かんとした際自動車二台で乗込んだ伊勢崎署員に前記十名全部検束された理由を質しに赴いた所同氏も検束される騒ぎあり県特高課員数名総動員の署員の活動で同署はもの／＼しい緊張を呈した之れが為講演会は弁士が骨抜きとなり支部員一同は狼狽し二百余名の聴衆の為め間に合せ弁士を立て講演を続け同時半頃閉会した。尚検束理由は伊勢崎署では絶対に秘密に附して居る」

またつづけて、「代表者が伊勢崎署に出頭し釈放方を陳情す」と、いかにも民衆側がおれて「陳情」したかのように書いている。

九日同紙朝刊では、「検束者はすでに東京に送還 党員も時刻までに釈放 ナツプ作家検束騒ぎ」と報じ、検束の理由は絶対秘密に附しているのだから、という具合である。十日付けにも小さく載つている。

邦作たちは紳士協定が破られたことを三十六年間知らなかつたので、事件に参加

した人と警察しか知られていないと思つていた。私は、このことがこの事件について世間に知られないと今までの要因になつていないかと思つた。

矢島孝は「事件と騒動」群馬民衆闘争史で、次のように書いている。「警察側はおりから県会議員選挙で無産政党から、尾池真弓、大島義晴、立見米市らが立候補しており、たとえ文芸講演会とはいへ、小林多喜二ら中央の活動家が演説するとなつては権力側も恐れをなしていた。なんとしてもこの文芸講演会を開かせないというのが本当のところであつた。犠牲者を出さなかつたのは特筆すべきことではあつたが、活動家の検挙、起訴、実刑が目的ではなく社会主義思想の広がりを断固押さえろという思想妨害であつた。」

事件の全容を知つたあと、私は八田さん早瀬さんとともにまず菊池敏清宅を見せてもらつた。なんでも敏清は父親の清作が亡くなった後、残された三十町歩の田畑をすべて小作人に無料で分けてしまつたそうである。戦前のことで、戦後の農地解放の前であつたか、そして大きな気持ちの持ち主であつたかが想像される。

敷地は七、八百坪またはそれ以上あるか

と思うほど広大ななかに蔵と重厚な二階家が建つていた。やねには通気のための越屋根があり、なかは鍵がかかつていたのを見ることは出来なかつた。だいぶん傷んでいるが築百年以上経つているという古民家をこのまま朽ちさせてしまふにはあまりにも惜しい。八田さんにぜひ保存運動を起こして下さいといひ頼んでしまつた。中には入れないが硝子越しに部屋をのぞくと広い八畳間が二間つづきになつていて、その奥もおなじく八畳間がつづいていて、その奥も家としてここで冠婚葬祭ができるようにつくつてある、という説明を八田さんはされた。私は小梅の蒙商の謙御殿を思い出した。ふすまをとつばらうと大広間になるところが似ているのだ。この会場で多喜二は「台所と文学」を話したのだとつくづくとながめた。次に邦作さんの育つた盛男さんの家に行く。やはりおおきな民家で庭の柿の木が屋根よりも高く繁つていた。八田さんの説明には郷土の誇りの邦作さんであり、敏清さんであることが伝わってくる。「事件」がひとりの犠牲者も出さなかつたのは菊池清作、敏清と続く大地主がバックにあつたからという。

次に車で共栄館の跡地にむけて走つた。早瀬さんが貴重な跡地の地図を下さつたの

で、すこし探したがすぐ見つかった。国道四二六号線から路地に入ったところであった。今は駐車場になっている。この辺は昔花街で共栄館は芝居や浪曲のかかる娯楽施設だった。古くから住んでいるひとに伺うと、戦後も焼け残っていて、のちには一階は料理屋で二階は間切りにして間貸しをしていたという。外観は改装することなく手摺などもそのままであったという。四十年前まであったそうだ。

最後に伊勢崎警察署跡に行った。ここも駐車場になってしまっていて、市街地開発の波にもまれ、昔と一変してしまっただけ。昔の写真の面影はない。警察署を包囲した当時に思いを馳せ、八田さんに警官の自転車や帽子などをなげこんだ小川はどこにあるのですか、ときいたら、今は暗渠になっただけ六間道路のむこうの歩道の下を流れていると言う。

そして多喜二に若荷汁をふるまった小暮はる子さんが健在だということでお会いすることができた。現在九十六歳で息子さん御夫婦と住んでいられる。耳がとおく、筆談でお話した。

「多喜二さんのことをお話ししていただけですが」
と聞いたら、あまり憶えていない風だっ

たが、「多喜二の名」を聞くと眼をみひらかれた。

「ええ、小林多喜二という方が家にみえました」

と紙に書いてくださった。詳しいことは忘れてしまった、と言う。はる子さんは戦後旧満州から引き揚げて以後とても苦労されたそうだ。幼稚園の給食の仕事をずつとしていらしたと、八田さんが教えてくださった。帰り際に私の顔をじっとみて、握手をしてくださったことがわすれられない。

八田利重さんは、敏清さんから入党をすすめられたのちに盛男さんあと市会議員を務め、革新の炎を引き継ぎ、今日にいたっている。憲法九条を守る署名は茂呂地区で過半数に達したことも話して下さった。

敏清さんの印象をうかがうと、物静かな寡黙な方だったそうだ。ただ多喜二没後六十年の催しで「審選事件」のことを話されたという。その記録は残念ながら残っていない。敏清さんの奥さんは東京でダンサーを教えていて、伊勢崎でも若いひとにダンスを教えていて、ダンスを覚えたくて民主青年同盟(民青)に入った人もいたそうだ。敏清さんの意外な一面を知って、わたしは身近かな存在に感じた。

二年ほど温めていた伊勢崎行きが実現し、八田さん、早瀬さんとの出会いも得て私は充実した一日を送ることができた。お世話になった両氏にお礼を述べ、再会を約して伊勢崎を後にした。

(二〇〇七年、日本民主主義文学会第55回文学教室提出作品『樹陰55』「七沢温泉と伊勢崎における多喜二の足跡」の伊勢崎の部分を加筆・訂正。二〇〇五年から労働者教育協会の藤田廣登氏より示唆を受け『わが地方の日本共産党史』東京・関東版(日本共産党中央委員会出版局)などの資料を提出して下さり、伊勢崎へも同行願った。)

〈参考文献〉

- 『群馬県社会運動物語』(富沢実著 労働旬報社 一九六八年五月一日発行)
- 『事件と騒動 群馬民衆闘争史』(徳江健・石原征明 編著 上毛新聞社出版局 一九六七年十月十五日発行)
- 『随筆 柿』(菊池邦作著 壺系情報社 一九六七年十月十五日発行)
- 『小林多喜二』(手塚英孝著 新日本出版社 一九七一年十一月十日発行)
- 『自立する女性の系譜』(稲沢潤子著 一光社 一九七九年八月二十日発行)

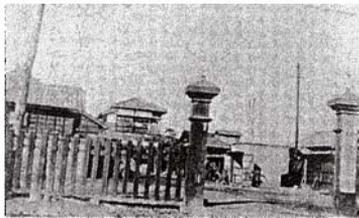
伊勢崎署包囲事件

1931年9月6日、小林多喜二は中野重治、村山知義、築地小劇場の女優三好久子ら5人とともに群馬県伊勢崎市(当時佐波郡伊勢崎町)の共栄館での文芸講演会に講師として招かれて本庄駅に向かった。ナップ支部の菊池敏清が出迎えた。敏清宅(佐波郡茂呂村)で多喜二は白い緋の着流し姿で座敷の床柱を背に「台所と文学」という題の共栄館で予定した内容の話をした。この時多喜二は講演会の準備の中心となった小林邦作から「蚕種製造業 小林邦作」という名刺を出され、それを懐に入れた。



多喜二らが検束された菊池敏清宅

その後一行は近くの菊池盛男宅で夕食をとり茗荷の味噌汁に舌つづみを打ち、もどってきたところを講師陣、主催者とも全員が警察に検束されてしまった。共栄館では何時までたっても講演が始まらないので、怒った聴衆は検束を逃れた盛男や吉田庄蔵らから事情をきいて、夜中をついて警察に押し寄せ折から県議員の選挙で手薄になっていた警察署を占拠してしまった。期せずして留置場の内と外で呼応して革命歌が響いた。県内から知らせを聞いて駆けつけた無産政党の支持者たちも警察とやりあい双方に軽傷者まで出た。結局、警察は占拠された弱味から話し合いを申し出たので、この事件で犠牲者を出さない、講師は全員明朝までに釈放する、この事件を公にしないという三点の合意で決着をみることになった。多喜二らは翌朝本庄駅から東京へ帰ることができた。多喜二が話をし検束された菊池敏清宅は築150年を経て現存している。



包囲された伊勢崎署(当時、『伊勢崎市史』)

15 ● 菊池敏清宅

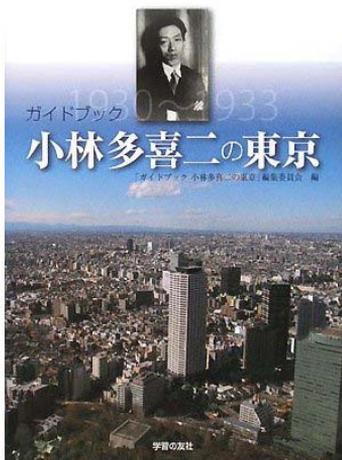
(伊勢崎市北千木町 2054)

● 旧伊勢崎署跡地

(伊勢崎市大手町 16・市営第一駐車場)

● 旧共栄館跡

(伊勢崎市緑 3-16 駐車場——フォスタジオ木津写真館前)



解説「伊勢崎事件」……「伊勢崎署占拠・多喜二奪還事件」をめぐる

1、「伊勢崎事件」の背景

「伊勢崎事件」を簡潔に表現したのは、『隨筆柿』に載る「伊勢崎署占領事件の真相を語る座談会」【以下「座談会」】で司会を務めた菊池盛男の次の言葉です。「文芸講演会が伊勢崎署の計画的な大弾圧によって、講師や主催者側の主なる者が総検束されてしまった。そのため集った聴衆や県下の斗士がおこつて、伊勢崎署に押しかけ、署長以下を追い出し、一時警察署を占領してしまったという事件です。」この弾圧の目的について、矢島孝は「民衆の勝利伊勢崎警察署事件」の末尾で「活動家を検挙・起訴・実刑というレールに乗せるのではなく、社会主義思想の広がりを断固抑えるという思想妨害であった。」(徳江健・石原証明編著「事件と騒動 群馬民衆闘争史」と論じています。ここでいう「思想妨害」は治安維持法よっての弾圧を意味していますが、関口正己は「戦禍の中の暮らし」で、「戦争は県民の暮らしを脅かした。戦争はいつの時代も人々の生活を圧迫し自由を奪ってきた。」として、本事件などを挙げて、「戦争への序奏ともいべき布石は厳しい言論封じから始まっていた。」と的確な指摘をしています。

ところが、本事件は、そういう弾圧を民衆の力で跳ね返したところに大きな特徴があります。「警察署を占領」した事態を菊池邦作は「伊勢崎署占領事件」の冒頭で「常識上ちよつと想像もできないような珍しい事件」「戦争前の無産運動に経験をもつ者にとつては、到底信ぜられない」「誰も取調べもつけず、調書もとられずに釈放されたという珍事件」(『隨筆柿』)と述べています。坂内一登司や吉田庄蔵は「普通なら騒擾罪」と語っています。

以上のような民衆のエネルギーが爆発した背景の一つに、主催者グループの特徴が関わっていると思います。主催者グループは、菊池邦作の「伊勢崎警察署占領事件」で述べられた「伊勢崎町の社民党【社会民衆党】支部を中心とする文化団体」とするのが一般的です。丑木幸男の「無産運動の分裂」を紹介した際にコメントを付しました。全農の采女支部の組合長は、菊池敏清宅の茶話会に出席していた弥勒寺清でした。一般的に無産政党は分裂していましたが、この地域に組織された無産政党は、社会民衆党の伊勢崎支部しかありませんでした。その所在地は、本事件の第一舞台になる茂呂村に置かれ、60人の党員がいました。その機関誌が昭和3年12月から昭和5年8月まで毎号1000部も発行されており、さらに『戦旗』の定期購読が50部あり、最高時150部という到達もあつたわけです。その関係で多喜二たちを呼べたわけです。私はコメントで「主催者グループの特徴も見えてきます。」と書きましたが、さらに、本事件の翌年の一月には菊池盛男が中心となり、消費組合運動が始まり、二月十一日の文学研究会開催時には「名和村」の小作争議に関わっています。つまり、幅広い活動を展開していたわけです。このような各分野の民衆の要求に根ざした、粘り強い、多様な運動が連携しつつ行われていた点に注目したいと思います。この文芸講演会は、伊勢崎

地域の無産運動の総結集として準備されたのではないのでしょうか。

次に、これまで見落とされてきた点があります。それは、一九三二年九月六日(日)という日は「国際青年デー」だったということです。日本国内では、「国際無産青年デー」として、無産青年の要求と反戦平和の旗が高く掲げられ、各地で運動が取り組まれました。東京朝日新聞群馬版九月五日付によると、九月六日(日)午後六時に、「佐波無産青年主催の文芸講演会」とあります。この点を石原証明は重視し、「この日は伊勢崎の共栄館で、無産青年同盟有志の主催によるプロレタリア作家文芸講演会が開かれる」(『ぐんまの昭和史(上)』)と述べています。「佐波無産青年」が「国際無産青年デー」と無関係のはずはありません。この「国際無産青年デー」を意識して、本事件の文芸講演会は設定されたと考えられます。そのことを裏付けるのは、同じグループが五ヶ月後に開いた文学研究会です。それは、建国記念日の二月十一日に開かれています。「上毛新聞」は「反建國祭」と報道していますが、まさに、開催日そのものに意味があるわけです。つまり、これらの行事そのものが、迫り来る戦争の危機に対しての、反戦平和の意思表示だったのです。九月六日の「伊勢崎事件」から十二日後の同月十八日には、満州事変が起こっています。

2、「伊勢崎事件」の序幕

講師の一人である村山知義の資料によると、講師一行は、上野駅より全員で出発しています。当時の時刻表から見ると、上野駅九時二五分発の列車三〇七号前橋行きでした。その講師一行を菊池敏清と菊池盛男は本庄駅に迎えに行きますが、二人は早く着いたので、本庄駅から上りに乗り、深谷駅で降り、列車三〇七号に乗り込み、講師一行と会い、本庄駅で下車しています。この時の様子を菊池敏清は、「座談会」で「とにかく乗客の顔をしらみ潰しに見てあるいた。」「ゆかた姿で将棋をさしている一行を見つめることができた。」としています。多喜二没後六十周年の講演の方では「中をずうつと見て歩く訳です。そしたらね、将棋指してるんがいろいろですよ、将棋を。『へえー。』と見てたが、この人がどうも小林さんらしい。聞いたら『はい。確かにそうです。』『じゃあ、この次が本庄ですから降りて下さい。用意して下さい。』別に背広も何も着ちゃありません。白地の、浴衣じゃないけど、単衣物(ひとえもの)着て、非常に気楽な格好で、それで本庄へついて降りた」わけです。高崎・前橋回りで伊勢崎駅に来るのより、利根川を越えて、伊勢崎に入る本庄の方が近いので、今でも利用されています。この事情を村山知義は「朝、一同上野駅から立った。」「上野を出て暫くすると、或る駅から主催者の農民組合の人が乗り込んで来て、前橋の駅には警官が出ていて全員逮捕する手筈になっているから、途中でおりてくれ、という。途中の或る駅でおりて、組合員の可成り大きな農家に行き」(『東京芸術劇場公演パンフレット』所収、1968年)と回想しています。深谷駅で乗り込んだ菊池敏清、盛男両人とともに本庄駅で降り、大きな菊池敏清宅

に行っていたことが確認できます。特高の妨害もあつたようですが、待たせてあつたハイヤー（タクシー）を使い、講師一行と迎えの二人は無事に茂呂村の菊池敏清宅に到着します。到着は午後一時頃でした。

3、「伊勢崎事件」の第一舞台……茂呂村

午後一時頃、本庄に迎えに行つた二人とともに、講師一行が菊池敏清宅に到着しました。敏清宅では、茶話会（小集会）が準備されておりました。菊池邦作は、「多喜二の話は約一時間位でおわり、外の二人の作家からも何か話があつてから、午后四時頃」（『随筆柿』）、夕飯を食べに近くの菊池盛男宅に移動したと述べています。ただ多喜二たちに夕飯を準備した木暮はる子は三時頃には一行がきたので、しばらく待つてもらつたと言っています（『随筆柿』）。ともかく、一時間位の多喜二の話と中野重治、村山知義の話で、ほぼ二時間近くはかかつていきました。参加者は、三十名くらいだつたようです。吉田庄蔵の談話から女性の参加もあつたことがわかります。また、菊池敏清が、多喜二の話が「台所と文学」という題だつたと述べています。この点について、藤田廣登は、多喜二が初めての選挙の応援演説で「『台所と政治がつながっている』という話を一所懸命しゃべつた」（『小林多喜二とその盟友たち』）と追求しています。多喜二の語る様子を菊池邦作は「座敷の床柱を背にして、あぐらを掻き火のない大きな火鉢を前にして腕組みをして話をつづける姿」（『随筆柿』）と書き残しています。村山知義は、先の記述に続けて「組合員の可成り大きな農家に行き、仕方ないからそこで芝居をやる、ということになり、組合員を召集し初めた」（『東京芸術劇場公演パンフレット』）と書いており、茶話会に人が集まつて来る様子が印象的だつたようです。

講師一行については、小林多喜二、中野重治、村山知義は確実です。他で名前があがつているのが、三好久子です。彼女については、富沢実が講演の中で疑問を呈していますが、事件当事者の何人もが三好久子だと言っています。また、清洲スミ子の名もあがつています。俳優（劇団員）の人数は三人か四人だつたようですが、女優二人は確かなようです。今回発掘された村山知義の回想によつて、なぜ俳優が講師一行に加つていたのかという謎は解けました。この文芸講演会には「左翼劇場の芝居」が用意されていたのです。また、文芸講演会への伊藤信吉の連帯メッセージを中野重治が預かるわけですが、彼は伊藤信吉の故郷、総社町の祭りに来たことがあつたのです。

三時頃から四時頃の間に、夕飯を食べに菊池盛男宅に移つた一行は、そこで茗荷の味噌汁を食べ、お代わりまでして大鍋を平らげたといひます。当時夕飯を準備した木暮はる子は、白い着物を着た多喜二が茗荷汁がうまいと喜び二杯たべ、「この辺では茗荷が沢山獲れるのですか？」と聞いたので「たべ切れない程とれます」と答えると「田舎はいいですね」と言つて笑つた、それが忘れられないと回想しています。（『随筆柿』）五時頃には夕飯を食べ終つたでしょう。講師一行は、一度菊池盛男宅から菊池敏清宅に戻りました。そこに、警察の二台

のトラックが乗り付け、関係者は総検束されたわけです。逃れたのは、渋沢広吉、吉田庄蔵、菊池盛男だと『随筆柿』では指摘しています。この検束は、午後五時前後だつたでしょう。（『上毛新聞』は午後六時頃としていますが、これでは講演会の開会自体に講師が間に合わないこととなります。）『随筆柿』で茶話会に出席した名前が一人あがつています。筆者を加えて十六人です。この中で、共栄館への移動が確認できるのが、上記三人に加え、弥勒寺撰三と竹内幸作です。茶話会終了直後に、共栄館に直行したと見られます。木暮はる子は「女優二人をふくめ七～八人の一行が、家の奥の座敷へドヤドヤと上り」と語つており、夕飯は講師一行が中心でした。吉田庄蔵は、「参会者が三々五々会場から、帰りかけていた時」にトラックがやつてきた、女性の参会者を逃がしたと言っています。

逆に、検束が新聞報道で確認できるは、菊池邦作、菊池敏清、斉藤力の三人です。後で検束された菊池盛男を足して四人ですが、「上毛新聞」では「五名」と報道しています。真下富太郎（『随筆柿』の中の慎太郎や真太郎は誤り）が集会の届け出をしたので、「二日置かれた」と語つたことが『随筆柿』に伝えられており、彼を入れれば、五人となります。一人のうち検束を逃れたのが五人、この時点で検束されたのが四人、後で一人、残り六人は叙述からは不明ですが、ほとんどは検束されたと推測されます。その点については、舞台を伊勢崎警察署に移す必要がありますが、その前に共栄館の文芸講演会の方に目を移してみよう。

4、「伊勢崎事件」の第二舞台……共栄館

共栄館の入場券は、一枚二十銭で三百五十枚作り、当日会場で二百五十枚の回収は竹内幸作が確認しています。混乱した後に来た人もいると想定できるので、二百五十人を越える人が参加していたでしょう。「上毛新聞」でさえも「二百余名」と伝えています。開会の六時前には、満員になっていたと考えられます。

五時頃には、菊池敏清宅で講師一行と主催者グループの一部が検束され、逃れた吉田庄蔵はオートバイで、家に一旦寄り、前橋の社大党【社会大衆党】本事件直前の八月に社会民衆党と全国労働大衆党が合併してできた政党】の事務所へ電話を入れてから共栄館に向かっています。夕飯の片付けを手伝つてから敏清宅に戻つた菊池盛男は、検束を知り、自転車共栄館に急行します。開会予定の六時頃、あるいは、六時を過ぎていたとも考えられます。駆けつけた菊池盛男が壇上上がり、聴衆に総検束の不当性を訴え、検束しようとする警官ともみ合いながら、「小林多喜二、中野重治、村山知義の諸先生や同志を奪還にゆく」と叫びますが、検束されます。ところが、連行される菊池盛男の後に百五十名位の聴衆が伊勢崎署に向かいます。この抗議の行進が、「東京朝日新聞」で検束された多喜二たちを「奪還すべく」行われた「デモ」として報道されたと考えられます。

共栄館の主催者グループは、弥勒寺撰三によると、菊池盛男の検束後、一度共栄館近くの斉藤力宅二階で対策会議を開いています。これは、吉田庄蔵も「相談の結果」「講演会だけは

やることに決」めたと述べており、さらに弥勒寺撰三によると「全県下から同志を緊急動員すること」も決まっています。動員には、吉田（坂下）みのぶが活躍しました。「上毛新聞」は文芸講演会の開会を「午後七時頃」としていますが、これは定刻より遅れて開会された時間のことだと考えられます。ともかく一時間位遅れて、文芸講演会は開始されました。

多喜二達の講師陣が検束されているので、代理弁士が演壇に立ちますが、次々と中止を命じられます。弥勒寺撰三によると、自分も詩を読み、応援に駆けつけた佐田一郎も演説をして、ともに中止を受けています。吉田庄蔵は、「十三人位の弁士全部が、中止されたので、聴衆が怒ってしまい、総立ちになり、講師を返せと迫り警察官と対峙」状態になったと語っています。ここで、共栄館の主催者グループは、「二回目の対策会議を持ちます。今度は共栄館の楽屋です。その結果、「今夜十二時を期して、伊勢崎署の襲撃」が決まり、動員のため「平鐘を乱打」するなど役割も決まりました。しかし、この計画は実行されなかったでしょう。この共栄館の主催者グループは待機してから、新聞記者に「対策は明日だ。」と言って、彼らを帰しました。「上毛新聞」に「十時半頃閉会」と書かれているのは、この時間だと推測されます。この後、共栄館の主催者グループと聴衆は、伊勢崎警察署に移動し、「東京朝日新聞」に「大乱闘」と報道される現場に立ち会うこととなります。つまり、伊勢崎署への意図的な襲撃は必要がなかったというか、「大乱闘」が起こったのです。いよいよ伊勢崎警察署仮庁舎に移ります。

5、「伊勢崎事件」の第三舞台……伊勢崎警察署仮庁舎

時間をちよつと戻して見ましょう。多喜二たち講師一行と幹部グループは五時頃検束された伊勢崎警察署に護送されました。村山知義の「丸太で囲んだ、猿の檻のような所だ。」というのが、木造の仮庁舎にびつたりの表現です。菊池敏清も「木造の、粗末な、家の、伊勢崎警察署、本当に。周りにドブみたいのがあって」とか「本当にちっぽけな、木造の悪い建築」と話しています。菊池邦作によれば、多喜二たち講師三人は「礼をつくし」「保護室」に入れ、自分は独房に入れられ、他は「人数が多いので」「収容し切れず」、斎藤力は「事務室のまん中に監視つきで座らされる」状況だったと回想しています。このような検束者の収容も六時前後には一段落したと推測されます。

この直後に、警官に検束、連行された菊池盛男が伊勢崎署に到着したと考えられます。「留置所に放りこまれないで、奴等の監視下におかれた」ということですが、これは既に収容できる部屋がない状態だったことに対応します。この菊池盛男の後を追って、抗議のデモ行進が警察署に迫ってきます。菊池敏清は、多喜二没後六十周年記念講演で「馬鹿にぎやかになったな」と思ったら、何だか表の方で、「ゴーゴーゴーする。」そこへ、ワッショイワッショイ入ってきた。向こうは驚いていたらしい。こんなに来るとは思わねえ。おそらく八十人、百人近く行ったと思うんです。」と語っています。留置所の中からデモ行進が「ワッショイワッショイ」と、「東京朝日新聞」によれば警察署に「乱入」したのです。これによって、警察署

の周辺は一気に「騒がしく」なり、「留置されている方も、それに勢いずいて、足をバタバタして床を踏み鳴らしたり、早く出せ！」「演説会を潰すつもりか？」などと怒鳴ったりした。」と菊池邦作は書いています。この状態は「多喜二は一刻も黙っていない。署長を出せ！何で俺たちをこんな所に入れた？」署長はもう官舎へ帰った。」と巡查がいう。「それなら官舎へ行つて連れて来い。そんな無責任なことがあるか？」と、多喜二は丸太を叩き、床を踏み鳴らし、あばれる。」と多喜二について回想した村山知義の記述と見事に一致します。

このような状態の中で「外からよく揃った革命家の合唱の音が響き、留置所の中からも」外の声に合わせて革命歌を唱い出した」のです。渋沢広吉は「はじめこっちの勢力が圧倒的に強かったので、署長【以下、警官は】全部姿を消してしまい、警察はカラっぽになってしまった。署長もモチロンのない。そこで僕が一時署長になると云って、署長の椅子に腰をかけた」と回想しています。菊池邦作は「警察の不当弾圧に激昂した民衆が、警察署を占領し、署内にアンペラ箆を敷いて、座りこみ、一時は署長以下全署員を追い出してしまった事件」と述べています。吉田庄蔵も「警官は全部署内から姿を消したので、仮庁舎の事務室を片づけ机や椅子は庭へ担ぎ出し物置から箆を引っぱり出して広くなった事務室に一同が座りこんだ」「警察の自転車は片ばしから、前の川に投げ込む」と語っています。

菊池盛男を追ったデモ行進が警察署に着き、警察署を包囲し、内外から威圧し、署長以下警官が退去し、民衆が署内に座り込み、署の内外で革命歌を歌うという占拠状態になりました。遅くとも午後七時頃には包圍状態になり、しばらくは威圧行為が続いた上で、占拠状態になったと思われま。警察側が警官の増員を行い、逆襲に転じ、「大乱闘」になるのが、ほぼ十一時頃、遅くとも十一時半頃であると考えられます。動員の時間を考えると、占拠状態になったのは、七、八時頃から九時頃の間と言えるかも知れません。

威信をかけた警察側の逆襲、警察署の奪還の中心は、署内に座り込む民衆の排除、外への強制撤去であったと考えられます。「どちらの側か、なだれを打って相手側に襲いかかったような気配」と菊池邦作は、独房の中で感じています。署内を占拠していた一人である渋沢広吉は「泉特高課長が警察官の一隊を引きつれて、われわれに襲いかかった。それで大乱闘になった。」とはつきり語っています。

動員された結果、警官の人数が、吉田庄蔵は「二五〇人位」、坂内一登司は「二百人」になったと言っています。民衆の人数については、坂内一登司は同じ「二百人」、吉田庄蔵は「二三百人」としています。渋沢広吉が少なめで「七、八十人」です。菊池邦作は「群馬県社会運動の歩み」では「集まった県下の精鋭分子三〇〇名」「聴衆を加えると五〇〇名」としていましたが、『随筆柿』では「三百人とも」「四百人ともいわれる」と断定を避けています。

この「大乱闘」を菊池邦作は「もみ合うこと数回で戦いはおわった。勝負なしの引き分け」、渋沢広吉は「十一時頃から二時頃までやり合った」、吉田庄蔵は「力関係で警察側は大衆に押され勝ちでした。そのような対立状態が午前一時半まで位つづき」としています。また、遠

藤可満は大乱闘の最中に、前橋で動員した三十人とトラックで十一時半頃、駆けつけ、そのまま大乱闘に加わっています。

6、「伊勢崎事件」の終結

遠藤可満は、午前一時頃に泉特高課長から「最年長者」だからと「事態の収拾」を持ちかけられています。坂内一登司は、「民衆側の代表は、石井君、吉田君、それに遠藤君」と三人を挙げていますが、吉田庄蔵は「石井弁護士と僕」と二人だけです。渡沢広吉は「僕と石井弁護士と吉田さんの三人」を、菊池邦作だけは「石井弁護士を筆頭に、遠藤可満、吉田庄蔵、渡沢広吉」と四人を挙げています。この警察側と民衆側の交渉は妥協が成立する午前二時頃まで何回か行われたことが「その都度大衆側に報告」などという表現から読み取れます。つまり、交渉は菊池邦作のいう四人で行われたといつて良いでしょう。

警察側と民衆側の妥協内容について、菊池邦作は、一九六〇年の「伊勢崎警察署占領事件」では「一 明朝講師を釈放すること、二 主催者側は責任者一人を除き全員明日釈放する、三 この騒ぎで犠牲者を出さない」としましたが、一九六七年の「伊勢崎署占領事件」では「① この事件の真相（警察占領のこと）は何れの側からも新聞に発表しないこと② 犠牲者を出さないこと③ 留置されている者をすぐ無条件釈放すること」と変化させています。これは、例えば渡沢広吉が挙げた三項目「① 全員翌朝までに釈放する② この事件で犠牲者を出さない③ 新聞に出さない」とほぼ同じです。次の吉田庄蔵の妥協条件の場合はどうでしょうか。「事件を公にしない（新聞記者に話さない）」という条件「夜が明けるまでに全員を釈放する。」従って「一人も犠牲者を出さない」ことを警察側が申し入れてきたと回想しています。本事件の社会的受容過程を見ると、吉田庄蔵の見解が最も説得力があるでしょう。つまり、民衆側の「事件を公にしない（新聞記者に話さない）」と警察側の「全員を釈放」の交換だったと考えるわけです。この民衆側に要求された「事件を公にしない（新聞記者に話さない）」は菊池邦作のいう「① この事件の真相（警察占領のこと）は何れの側からも新聞に発表しないこと」と合わせて『この事件の真相（警察占領のこと）は公にしない（新聞記者に話さない）』というのが本当の意味であったと思うのです。しかし、その前提である警察側の検束や弾圧そのものが不当なものでした。この事件に関わった人々の多くが、敗戦に始まる日本の民主化に積極的に働きかけ、戦後民主主義の地域での確立と革新勢力の形勢に尽力しています。本事件は、その出発点の一つにあたる事件だったと言えるでしょう。本事件より二年後、正確には一年五ヶ月後の一九三三年二月二十日小林多喜二は特高警察の拷問によって虐殺されましたが、多喜二の遺志を継いだ事件当事者が多数生まれたことも本事件の特徴の一つと言えるかも知れません。

（長谷田直之）

編集後記

当初の実行委員会では多喜二の短編なんかを読んだりしていましたが、資料集を出すことにしてからの実行委員会では、毎回何か「伊勢崎事件」についての資料を添付し、それを読んだりしました。その結果、「伊勢崎事件」についての資料はかなり集まったと思います。ただ資料集につきものの解題は付けることはできませんでした。しかし、何らかの形で、「伊勢崎事件」の普及に貢献できれば幸いです。

本資料集作成にあたり、早瀬演さんには手厚いご指導を頂きました。また以下の方々や諸機関・諸団体には特別にお世話になりました。ありがとうございました。

（記／直之）

八田利重さん、早瀬演さん、前澤哲也さん、大沢勝幸さん
関口昭三さん、竹内弘次さん、星野和俊さん、植田泰治さん
佐藤三郎さん、相川之英さん、飯島涼さん、藤田廣登さん
蛸崎澄子さん、平山知子さん、山口富男さん、永井福二さん
北村隆志さん、長谷田和雄さん、長谷田公子さん

伊勢崎市、伊勢崎市議会図書室、伊勢崎市立図書館

伊勢崎市立境図書館、群馬県立文書館、群馬県立図書館

前橋市立図書館、高崎経済大学付属図書館、埼玉大学付属図書館

映画「時代を撃て・多喜二」製作委員会、白樺文学館

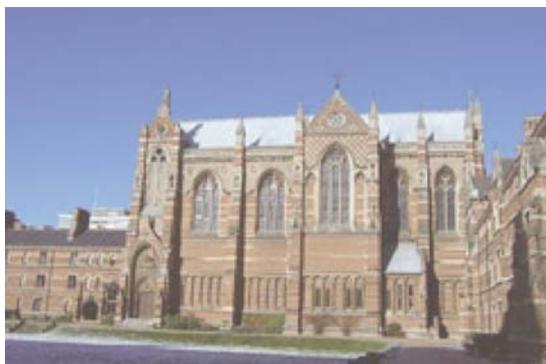
日本共産党伊勢崎佐波地区委員会、日本共産党群馬県委員会
治安維持法国家賠償同盟群馬県支部

「伊勢崎・多喜二祭」実行委員会

代表：八田利重 事務局：長谷田直之

実行委員：梅沢正紘、八田幸子、関根幸江、鈴木修、山口富雄
北島元雄、八田和佳、早瀬演、箕輪進、滝川哲雄

オックスフォード大学における小林多喜二記念シンポジウム開催のご案内



オックスフォード多喜二シンポジウム組織委員会は、小林多喜二(1903～1933)の生誕105年・没後75周年となる本2008年の9月16日から18日までの3日間、イギリス・オックスフォード大学において、「2008年 オックスフォード大学における小林多喜二記念シンポジウム」を開催します。

メインテーマを、「多喜二の視点から見た身体・地域・産業」とし、オックスフォード多喜二シンポジウム組織委員会主催、小樽商科大学、白樺文学館多喜二ライブラリー

が後援します。ヨーロッパ、アジア各国の研究者が、国際的研究成果を交流する一大イベントとなることが期待されます。

同シンポジウムの企画は、リンダ・フローレス(イギリス、オックスフォード大学)、ヘザー・ボーウェン＝ストライク(アメリカ合衆国、ロヨラ大学)、島村 輝(日本、女子美術大学)の三者で、白樺文学館多喜二ライブラリーが事務局を務めます。

実施要綱、イベントスケジュールなどは以下の通りです。

「2008年 英国・オックスフォード大学における小林多喜二記念シンポジウム」実施要綱

小林多喜二生誕105年・没後75周年となる本2008年、9月16日から18日までの3日間、イギリス・オックスフォード大学において、「2008年 オックスフォード大学における小林多喜二記念シンポジウム」を開催いたします。

タイトル:「2008年 英国・オックスフォード大学における小林多喜二記念シンポジウム——多喜二の視点から見た身体・地域・産業」

主催 オックスフォード多喜二シンポジウム組織委員会

後援 小樽商科大学、白樺文学館多喜二ライブラリー

企画 リンダ・フローレス(イギリス、オックスフォード大学)、ヘザー・ボーウェン＝ストライク(アメリカ合衆国、ロヨラ大学)、島村 輝(日本、女子美術大学)

期日 2008年9月16日～18日

場所 英国・オックスフォード大学キーブルカレッジ

事務局 白樺文学館多喜二ライブラリー

9月16日(第1日)

12:00 - 13:30 参加登録(オックスフォード大学キーブルカレッジ)

13:30 - 14:00 開会式

14:00 - 15:30 第1分科会「女性——身体とメディア」

* Linda Flores “Love and Revolution: Images of Women in the Works of Kobayashi Takiji and Hirabayashi Taiko”

* Reiko Abe Auestad “Kobayashi Takiji, Strindberg’s Miss Julie, and the Battle between the Sexes”

* 神村 和美 言説の罫・空白のカー「救援ニュースNo.18附録」・「暴風警戒報」

* 中川 成美(ディスカッサント兼任) 小林多喜二における《大衆》—メディア・ジェンダー・ヴィジュアルリティ

16:00 - 16:40 基調報告

• Vera Mackie “Sex, Work and Text in Imperial Japan: Strategies of Reading”

17:00 - 懇親会

9月17日(第2日)

9:00 – 10:30 第2分科会「身体と権力」

- * 荻野 富士夫 小林多喜二と治安体制
- * 山崎 真紀子 拷問における身体の収奪——多喜二と春樹(仮)
- * Curtis Anderson Gayle“Capitalism, Empire, and the Body: what the 21st century world can learn from Takiji’ s work
- * Heather Bowen-Struyk (ディスカッサント兼任) The Pain of Others (title ad hoc)

11:00 – 12:30 第3分科会「地域と植民地主義」

- * 河西 英通 小林多喜二における異境感とリージョナリズム
- * 高橋 秀晴 無意識的原点としての生地秋田
- * 尾西 康充 <内国植民地>としての北海道一有島武郎と小林多喜二
- * 小森陽一 (ディスカッサント兼任) (題目未定)

13:30-15:00 並行分科会 第4分科会「モダニズムとリアリズム、大衆文学」

- * Annika A. Culver“Koga Harue’ s Constellation of Modernity: A Japanese Surrealist Artist’ s View of the Modern in Interwar Japan”
- * 内藤 千珠子 『痴人の愛』における帝国のジェンダー構造と資本主義
- * 鳥木 圭太 ナップリアリズムの再検討——「党生活者」を起点として——(仮)
- * 王 成 プロレタリア文学の活力——小林多喜二から松本清張へ
※このセッションはディスカッサント無し。討論の時間も特にとっていない。

13:30 – 15:00 並行分科会 第5分科会「群衆と闘争」

- * Cody Poulton“After the Quake: A Dramatic Representation of the Korean Massacre by Leftist Playwright Akita Ujaku”
- * Orna Shaughnessy“Strike! Representations of the Crowd and Violence in works of Kobayashi Takiji and other contemporary cultural productions”
- * 高 榮蘭 「共闘」の場における「女性」表象
- * 島村 輝 (ディスカッサント、討論司会兼任)
多喜二の描いた「新女性(モダンガール)」——「安子(「新女性気質」改題)」を軸として (title ad hoc)

15:30 – 17:00 第6分科会「植民地時代の Korea」

- * Youngeun Jang Socialist Mobility and Landscapes
Representations of Russia and the Magazine “Samchūnli” in Chosūn (Japanese-Colonized Korea) in the 1930s
- * Samuel Perry Writing for Children and Revolution in Japan and Colonial Korea
- * 李 修京 Kim Dooyong and Kobayashi Takiji
- * 朴 眞秀 (ディスカッサント、討論司会兼任) 韓国プロレタリア文学の国際主義と「民族」概念

17:10 – 18:40 映画「時代を撃て・多喜二」上映

18:50 – 夕食

9月18日(第3日)

8:30 – 10:30 第7分科会 円卓討論「労働と教育に関する諸問題」

- * 北村 隆志 小林多喜二論報告メモ——「労働者階級の状態」から「連帯」へ
- * 岡野 幸江 「女工哀史」とグローバリズム
- * 張 如意 『蟹工船』と「農民工文学」——『蟹工船』の現実意義をめぐって
- * 岡村 洋子 平和教材として読む「蟹工船」——高等学校での実践報告
- * Adrienne Carey Hurley Teaching Takiji: Pedagogies of Love and Liberation
討論司会 Heather Bowen-Struyk, 島村輝

11:00 – 12:30 第8分科会「多喜二と映画」

- * 宜野座 菜央見 The Age of Agitprops ? : Japanese Cinema in the Season of Disputes
アジトプロップの時代? : “ 争議の季節 ” の日本映画
- * 秦 剛 小林多喜二と宮崎駿：一九二九年に交差する歴史と表象——『蟹工船』と『紅の豚』をめぐって
討論司会 Linda Flores

12:30 – 13:30 昼食

13:30 – 14:00 閉会式

14:10 - 映画「蟹工船」上映